蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ

２００５年3月

大阪府教育委員会

はじめに

四條畷市・寝屋川市一帯に広がる讃良郡条里遺跡は、古墳時代を中心に様々な性格の遺構が錯綜する巨大な遺跡です。この遺跡の南端部分に大阪府土木部によりなわて水環境保全センターの建設が計画されました。建設に先立ち、大阪府教育委員会は1999年度から予定地内の試掘調査を実施し、その結果、讃良郡条里遺跡内で固有の性格を持つ蔀屋北遺跡を発見し、あらたに周知いたしました。

蔀屋北遺跡の発掘調査は2001年度から実施しています。これまでの発掘調査で、古墳時代中期の巨大な集落を構成する住居跡、井戸、溝などの数多くの遺構、遺物、そして朝鮮半島から移入された土器が発見されました。土坑からは丁寧に埋葬された馬の全身骨格も発見しています。この馬は5世紀後半の馬で、日本列島に馬がもたらされた直後の時期のものです。これらの調査成果から蔀屋北遺跡と朝鮮半島から渡来した人々や、また『日本書紀』などに記された河内の馬飼との関連が大いに推測されました。

今回ここに刊行いたしますのは、2002年度～2004年度にかけて発掘調査を実施しました調査区の概要報告書です。今回の調査では、古墳時代中・後期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸など数多くの遺構、また多様な遺物を発見しました。30棟余り検出した掘立柱建物のなかには建物の柱が良好に遺存しているものが何ヶ所もみられ、また多くの建物の柱穴から礎板を検出しました。

これらは当時の建物の構造などを知る上で貴重な資料であり、蔀屋北遺跡が古墳時代中期から後期につづく巨大集落であることが判明いたしました。この調査成果により、また今後長期にわたる発掘調査により地域の歴史がますます豊かになっていくとともに、古代の日韓関係史にも大きな影響を与えるものと考えます。

調査に際しましては、地元の方々並びに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたしております。引き続き、蔀屋北遺跡の発掘調査に皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

平成17年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　向井正博

例　言

1．本書は、大阪府土木部の依頼をうけ、寝屋川流域下水道事業なわて水環境保全センター建設に先立って、平成14年５月７日から平成15年12月５日までの期間に実施した四條畷市砂・蔀屋に所在する蔀屋北遺跡の発掘調査概要・Ⅱである。

2．現地調査は、文化財保護課調査第一グループ技師藤田道子が担当し、最終遺構面遺構検出は一部同グループ技師岩瀬　透の補助をうけた。これにともなう遺物整理作業は調査管理グループ技師小浜　成・林　日佐子・藤田道子を担当者として実施した。

3．調査の実施にあたっては、四條畷市砂・蔀屋自治会、寝屋川市堀溝自治会をはじめ四條畷市教育委員会、寝屋川市教育委員会、大阪府東部流域下水道事務所など多くの方々の協力を得た。

4．写真測量は、㈱ワールドに委託した。なお、撮影フィルムについては、同社で保管している。

5．本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。出土木製品の保存処理は（株）吉田生物研究所に、樹種鑑定は㈱パリノ・サーヴェイに委託した。

6．本書で用いた座標値は、日本測地系（平面直角座標第Ⅵ系）で、付図：第11面全体平面図には世界測地系座標値を併記した。

7．本調査の調査番号は、02007（平成14年度）・03001（平成15年度）である。

8．本書の執筆・編集は藤田がおこなった。

9．本概要は300部作成し、一部あたりの単価は1,166円である。

目　　次

はじめに
例言
第１章　調査の経過……1
　調査に至る経過……1
　調査の方法……2
第２章　調査成果……3
　１．調査の概観……3
　２．古墳時代の遺構と遺物……6
第３章　考察……59

図　版　目　次

図版１　１．調査地遠景（南から）
　　２．調査地遠景（北から）
図版２　１．第11面全景（北東から）
　　２．第11面全景（南西から）
図版３　１．第11面全景（北東から）
　　２．第11面全景（南西から）
図版４　１．井戸2476井戸枠（上部）設置状況
　　２．井戸2476堀方検出状況
　　３．井戸2476井戸枠検出状況
　　４．井戸2476井戸枠内とめ木検出状況
　　５．井戸2476井桁上部検出状況
図版５　１．井戸2476井桁（下部）設置状況
　　２．井戸2476井桁北東コーナー部
　　３．井戸2476井桁北西コーナー部
　　４．井戸2476井桁内遺物出土状況
　　５．井戸2476井桁内遺物出土状況（下層）
図版６　１．井戸2549井戸枠設置状況
　　２．井戸2549井戸枠検出状況
　　３．井戸2549井戸枠内とめ木検出状況
　　４．井戸2549井戸枠外面とめ木検出状況

5．井戸2549内ひょうたん出土状況
6．井戸2549遺物出土状況
図版７　1．井戸2549敷板検出状況
2．井戸2549敷板除去後遺物出土状況
3．井戸2549遺物出土状況（最下層）
図版８　1．竪穴住居1693（北から）
2．竪穴住居1693内カマド
図版９　1．調査区西部竪穴住居集中部分
2．竪穴住居3333（北から）
図版10　1．竪穴住居2440（北から）
2．竪穴住居3217（東から）
図版11　掘立柱建物１
図版12　掘立柱建物２、３
図版13　掘立柱建物４、５、６、７
図版14　掘立柱建物８、11、18、30
図版15　掘立柱建物９
図版16　掘立柱建物12
図版17　掘立柱建物14
図版18　掘立柱建物15
図版19　掘立柱建物19
図版20　掘立柱建物16、21、22
図版21　掘立柱建物10、13、17、20
図版22　掘立柱建物23、35
図版23　掘立柱建物25
図版24　カマド出土状況　掘立柱建物１北側土器溜り遺物出土状況
図版25　溝、土坑遺物出土状況
図版26　土坑遺物出土状況
図版27　井戸2476、2549出土遺物
図版28　滑石製石製品、土製紡錘車、砥石、ふいごの羽口、椀型鍛冶滓、鉄製品
図版29　掘立柱建物１、２出土柱材、掘立柱建物12、14出土礎板

第１章　調査の経過

１．調査に至る経過

四條畷市蔀屋・砂に所在する蔀屋北遺跡は、生駒山地から流下する岡部川により形成された沖積地に立地する弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。当遺跡はなわて水環境保全センター建設に伴う試掘調査により発見された。遺跡は広大な面積をもつ讃良郡条里遺跡の範囲内に含まれていたが、2000年に実施した２回の試掘調査、そして2001年に実施した下水管渠発進立坑の調査結果により、讃良郡条里遺跡のなかでも固有の性格を持つ遺跡として新たに蔀屋北遺跡として周知されることになった。（第１図）

なわて水環境保全センター予定地の発掘調査は、水処理施設（浄化槽）から開始した。水処理施設は約17,200㎡の面積を持つため三分割し、南よりＡ、Ｂ、Ｃ、調査区としＡ、Ｃ、Ｂ調査区の順に調査を開始した。Ａ調査区の調査は2001年７月に開始し、2003年３月に終了した。Ａ調査区からは馬の全身骨格が出土した土坑など馬飼いの存在を推定させうる古墳時代の遺構と遺物、そして陶質土器、韓式系土器など朝鮮半島からの移住民の存在を予想させる遺物が多量に出土し、多大な成果をあげた。その調査成果は『蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅰ』に詳しい。

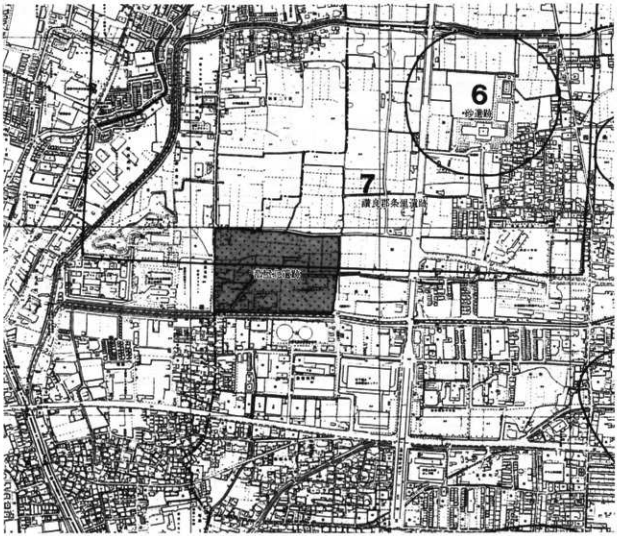


図１　蔀屋北遺跡の位置（1/10000）

C調査区の調査は2002年５月に開始し、2003年12月に現地調査を終了した。本概要はC調査区の調査成果である。

２．調査の方法

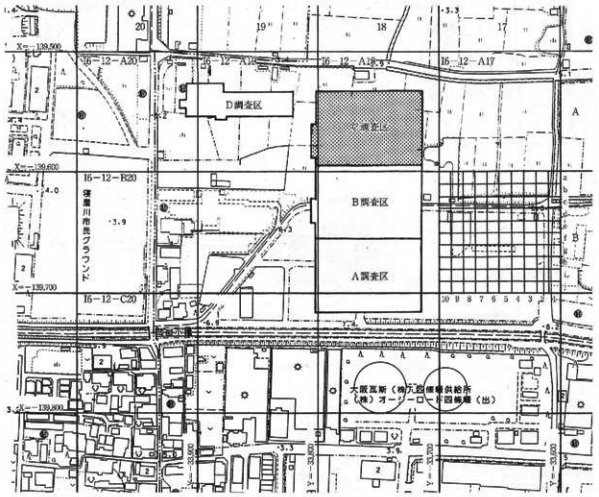
地区割は国土座標（第Ⅵ座標系）を基準としている（第２図）。C調査区は、大半がX座標＝－139,500と－139,600に、Y座標＝－33,700と－33,800の座標軸により区画されたⅠ６－12－A18区の100ｍ四方の区画内に収まるが、西半の一部はⅠ６－12－A19区にかかる。遺物の取り上げはこの区割りを縦横さらに10分割してアルファベット（ａ～ｊ）とアラビア数字（１～10）で表現された10ｍメッシュでおこなった。遺構の位置の記述はこの10ｍメッシュの区画名を記入している。

遺構番号は検出した順に通し番号をつけたが、掘立柱建物については固有の番号を１から順に与えてある。

第２章　調査成果

１．調査の概観

調査開始時点に盛土等近現代の堆積土が除去されていたので、T.P.＋3.25ｍから人力調査を開



第２図　調査区の位置と地区割

始した。T.P.＋1.5ｍまでの間に検出した主な遺構面は11面である。第１、２面は近世、第３面室町時代、第４面～第８面は平安時代の耕作地跡、第10面が古墳時代後期の、第11面が古墳時代中、後期の集落跡である。

古墳時代中・後期では、調査区南東に大きな谷部がありこの谷のレベルが最も低い。古墳時代の集落が廃絶した後、調査地一帯は耕作地となったが、耕地開発とともに谷部は埋め立てられていくことになる。最終的に谷地形が解消されたのは室町時代以降である。

第３図は調査区南壁土層断面の一部（西部）である。この部分の土層断面をみると古墳時代に存在した谷地形が徐々に埋め立てられ耕地が造成されていく過程がわかる。層序の説明とともに検出遺構面の説明をする。

１層から９層は平安時代後期までの土層である。これらの層を除去した段階で調査区北半部の微高地上に平安時代後期の集落跡を検出している。

10層から13層は平安時代後期の耕作土で、13層を除去した段階で５ａ面を検出し、調査区の一部で畦畔を検出している。

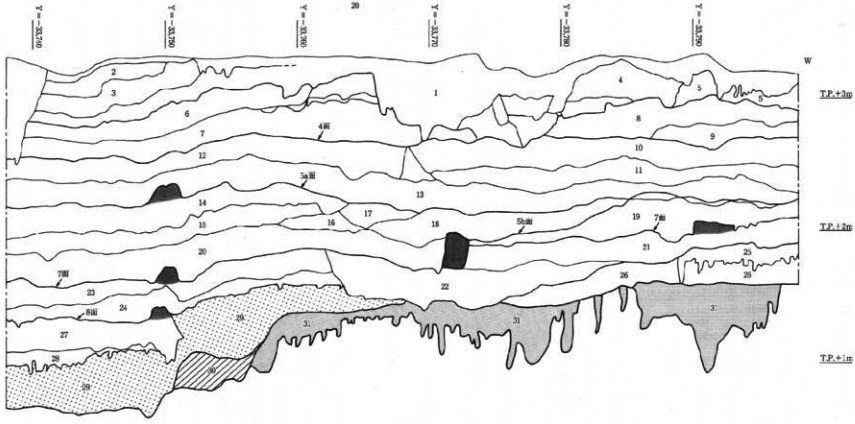
14層から18層は平安時代後期の耕作土で、これらの層を除去した段階で５ｂ面を検出した。５ｂ面の全体平面図が第４図１である。この面では正南北方向の段により区画された耕地を検出した。

19、20層は平安時代中期の耕作土で、これらの層を除去した段階で第７面を検出した。第７面の全体平面図が第４図２である。この面ではほぼ正南北方向の条里制地割による畦畔により区画された水田を検出した。

23、24層は平安時代前期の耕作土で、これらの層を除去した段階で第８面を検出した。第８面の全体平面図が第４図３である。第８面の畦畔は調査区南東の谷地形に沿う形で作られており、当地の条里制施行が平安時代前期にさかのぼらないことを裏付けることになった。

29層は古墳時代後期の遺物包含層、灰色粘土で南東谷地形の上部層にあたる。30層は古墳時代中期の遺物包含層黒灰色粘土である。調査区北部では中期と後期の遺物包含層の分層が困難を極めたが、緑灰色粘土の混じりかた、遺物の違いを手がかりに灰色～暗灰色粘土を掘り下げ第10面を検出した。第５図は第10面の全体平面図である。第10面は古墳時代後期の遺構面で、検出レベルT.P.＋1.8ｍ前後、柱材が残存していた掘立柱建物、カマド等を検出している。青灰色シルト～粘土層の上面で、最終遺構面の第11面を検出した。付図は第11面の全体平面図である。検出レベルはT.P.＋1.5ｍ前後、竪穴住居跡、掘立柱建物、井戸など古墳時代中期～後期の集落を構成する遺構を多数検出した。

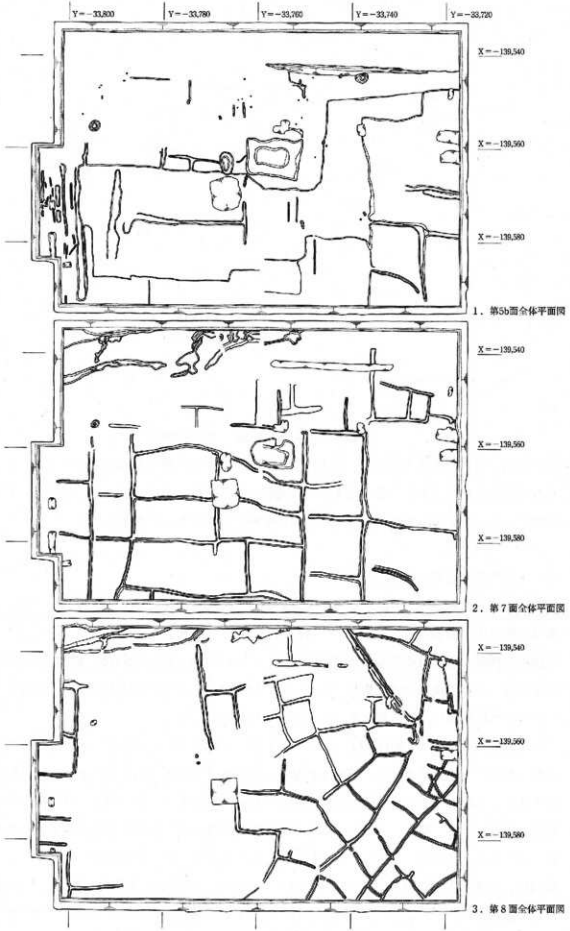
31層は古墳時代の遺構埋土である。概して部屋北遺跡古墳時代遺構面の遺構埋土の土質は大きく二分できる。一つはベース土である緑灰色シルト～粘土がブロック状で含まれる灰色粘土、ブロックは大きいものではこぶし大にもなり、柱穴の埋土はこのブロック土の混じり具合により分層をおこなった。おもに第10面で検出した柱穴、切りあい関係がある柱穴でも上面の遺構、古墳



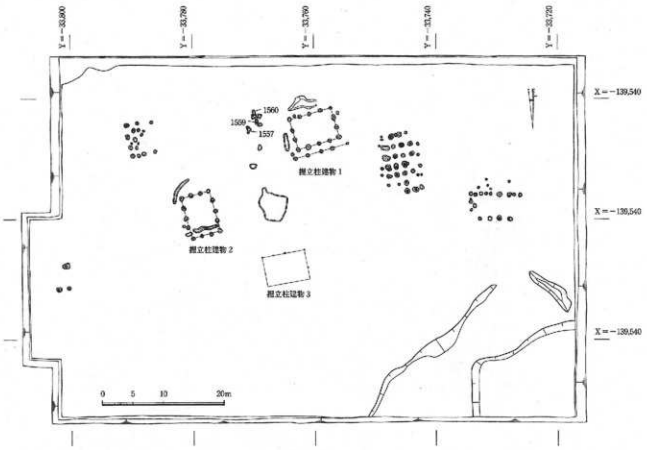
1. 灰黄褐色土
2. 青灰色粘土（鉄分沈着が青しい）
3. 青灰色粘土（黄色砂が混じる）
4. 暗灰色土＋灰白色砂
5. 暗灰色土＋褐灰色土
6. 暗灰色土＋灰色粘土
7. 暗灰色粘土
8. 暗黄灰色土＋灰色粘土
9. 暗灰色粘質土
10. 暗青灰色粘土
11. 青灰色粘土
12. 青灰色粘土
13. 暗青灰色砂質土
14. 暗灰色シルトに青灰色砂がブロックで混じる
15. 黒灰色シルトに青灰色砂が混入
16. 暗褐色砂
17. 暗褐灰色粘質土
18. 黄褐色砂
19. 砂礫層
20. 黄褐色砂＋暗青灰色砂質土
21. 青灰色砂質土
22. 暗青灰色粘土に砂がブロック状に多く混じる
23. 暗灰色粘質土に灰色砂が混入
24. 灰白色砂礫層
25. 暗青灰色砂質土＋黄色砂
26. 灰色粘土に青灰色砂が少々混じる
27. にぶい灰色粘土（砂ブロックで含む）
28. 砂礫
29. 明灰色粘土
30. 黒灰色粘土
31. 灰色粘土に緑灰色粘土シルトがブロック状に混じる

1m
5m
0

第３図　調査区南壁土層断面図



第4図　第5、7、8遺構面全体平面図



第5図　第10遺構面　全体平面図

時代後期の遺構埋土はこのブロック土による。もう一つの遺構埋土はほとんどブロック土が混じらない暗灰色粘土である。この埋土を持つ遺構からは遺物も余り出土していない。しかし切りあい関係からみて下層の遺構になり、古墳時代中期に属するものと考えられる。

2．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構面である第10、11面からは井戸、竪穴住居跡、掘立柱建物、カマド、土坑など集落を構成する遺構を多数検出した。検出した遺構の大多数は柱穴であるが、半数以上の柱穴から建物を構成する部材である柱や礎板が出土した。柱の出土数は約160本、礎板は470点以上検出している。さらに柱穴の底に板材ではなくワラ材を敷きこんでいる例も20ヶ所で確認した。これらの資料は低湿地集落での建物のあり方を示す好例といえよう。

出土遺物はコンテナ約600箱以上になる。土器、土製品では、土師器、須恵器、製塩土器、U字型土製品や、移動式カマド、筒状土製品を含むさまざまな韓式系土器、また算盤玉形紡錘車などの小型品も出土している。木製品では上記の礎板、柱に加え、井戸枠材、井戸枠に転用された船材、下駄、木錘、櫂、ミニチュアの舟形木製品等が出土している。石製品は出土点数を挙げると、滑石製の臼玉900点余り、管玉は未製品を含めて7点、勾玉も未製品を含めて3点、双孔円盤44点、紡錘車4点、ガラス小玉27点が出土している。特筆すべき遺物としては、馬の骨、歯、そして鉱滓、ふいごの羽口、砥石、鍛造鉄片等鉄鍛冶関連遺物が出土していることである。その中から主な遺構と遺物について詳述したい。

井戸は第11面で3基検出した。1基は素掘りの井戸、2基は船材等を転用した井戸枠を設置した井戸である。

井戸2476は井戸枠を持ち、g 4区で検出した。(第6図)(写真図版4、5)南東の谷が入り江状に入り込む先端に位置する。検出レベルはT.P.+1.4mである。掘方の平面形は径約3.3mの円形、断面は逆台形、井戸枠の先端から井戸底までの深さは約3mである。井戸底からは現在も湧水があった。井戸枠は上下に分かれる。上部の井戸枠は断面弧形の部材を2つ抱き合わせていたが、北側の部材の幅がやや小さくそれを補うように別の板材(第7図1)を東側に足して合わせていた。上部井戸枠の平面形は長径1m、短径55cmの楕円形である。井戸枠内は棒状の角材でつっぱりがしてあった。

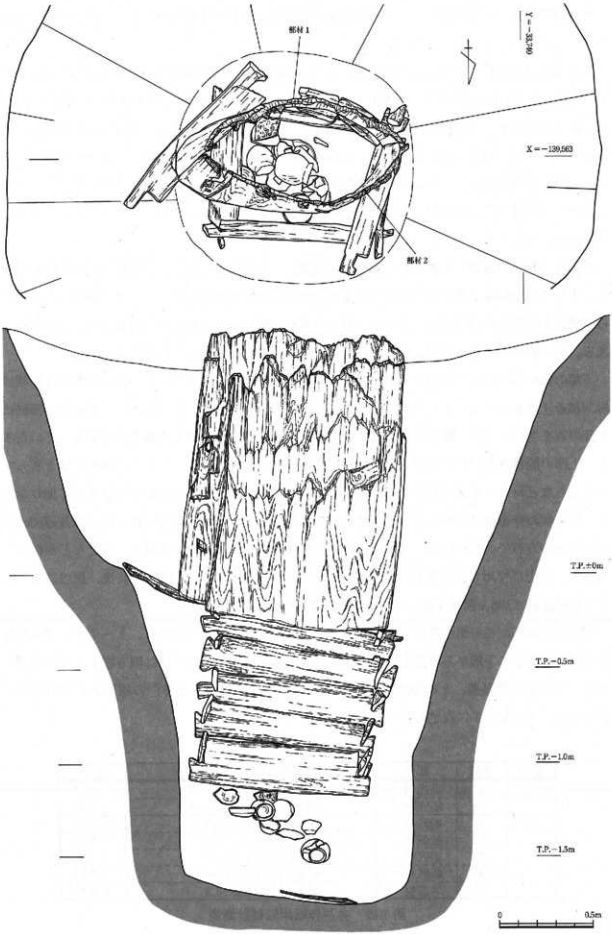
井戸枠部材1(南側)(第8図)、部材2(北側)(第7図2)ともに、片側の側縁に段が残存し、もう片側の側縁は井戸転用時に切断された際の手斧痕が鮮明に残っていた。側縁に残る段から準構造船の船底材の可能性があるが、材が非常にぶ厚いことなど船材と断定するには疑問点も残る。第1表は井戸枠に転用された船材(可能性のあるものも含む)の計測表である。

下部の井戸枠(第9～11図)は板材の両端から約10cmの部分を上下に欠いて、それを井桁状に組み積み上げたもので、T.P.－0.25m～－1.25mのあいだで検出した。南北の一番底辺の部材は上部のみを欠いている。検出したのは5段であるが、5段目の部材も両端を上下に欠いていたこと、上部の船材の井戸枠と下部の井桁の間に井桁の部材が押しつぶしたように倒れてはさまっていることなどから、本来は井桁のみの井戸だったが、上部が崩れたため掘方をひろげて掘りなおし、井筒状の枠を載せて作りなおした井戸と思われる。下部の井桁組井戸枠の内法は長辺80cm×短辺70cmの方形で、井戸枠内には暗灰色粘土が堆積していた。井桁の部材は、ほとんどが板目の板材で、短辺に使用された板材は長さ85cm前後、幅15～20cm、厚みが3.5cm前後、長辺に使用された板材は長さ105cm前後、幅15～20cm、厚みが3.5cm前後を測る。

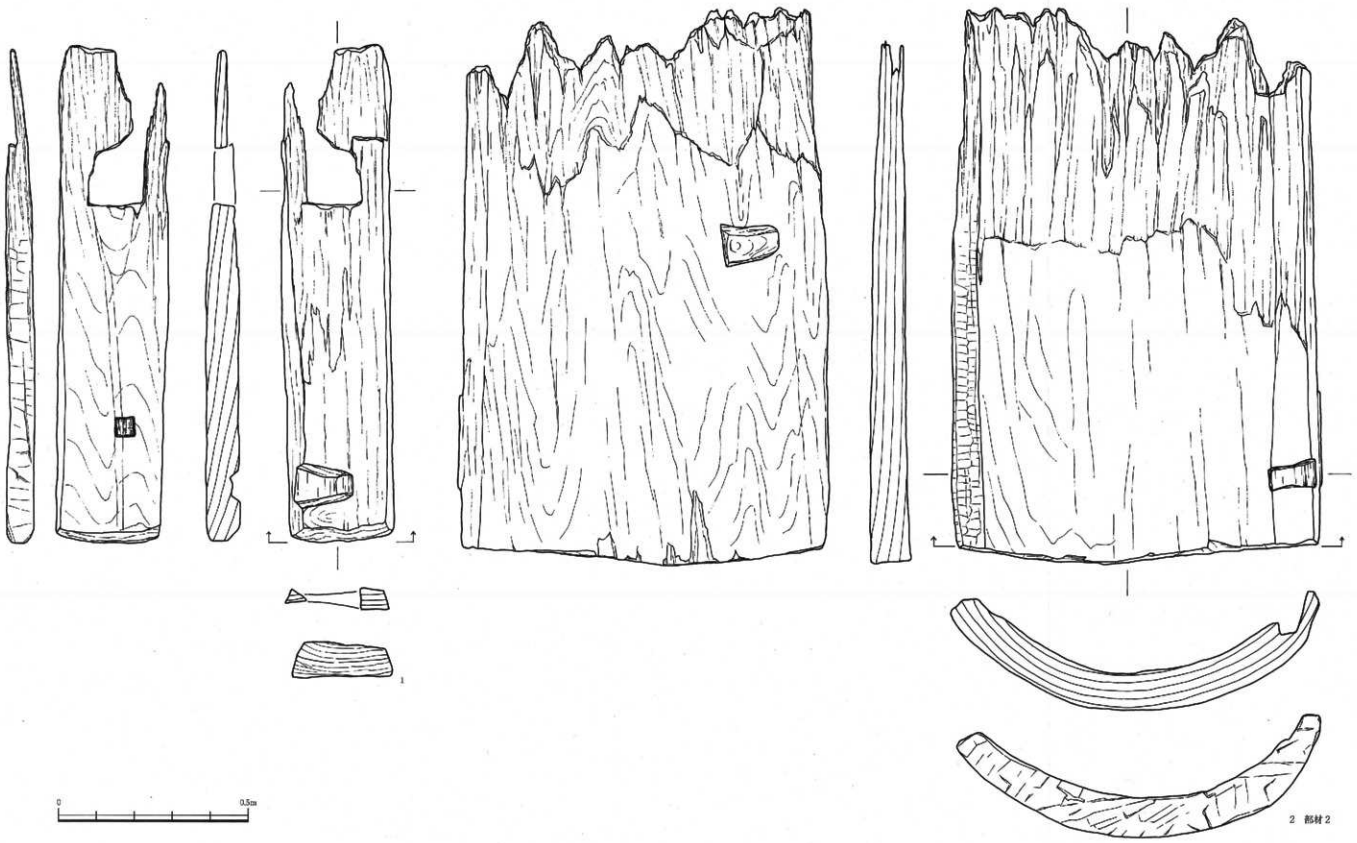
第12図は2476からの出土遺物実測図である。5、6は井桁枠最下段から、1～4、7は井桁枠最下段よりさらに下層からの出土、8～10、20は上部井戸枠内、11～19は堀方埋土からの出土である。1の須恵器杯蓋、8の須恵器杯身、廻の編年をあてはめると井戸の使用された時期は6世紀中頃で6世紀後半に廃絶したと推定される。

井戸	部材	部位	幅×長さ×厚さ×高さ(cm)	樹種
2476	1	船底材?	113×152×7.5～9.5×32	スギ材
	2	船底材?	98×146.5×6～11×33	スギ材
2549	1	船底材	25.4×147.6×4～5.3	スギ材
	2	舷側板	20.5×165×3.7～4	スギ材
	3	船底材	46×153×3.7～5.8	スギ材
	4	船底材	45.8×166.4×5.4～6.2	スギ材
	5	船底材	44.8×171×2.2～4.3	スギ材

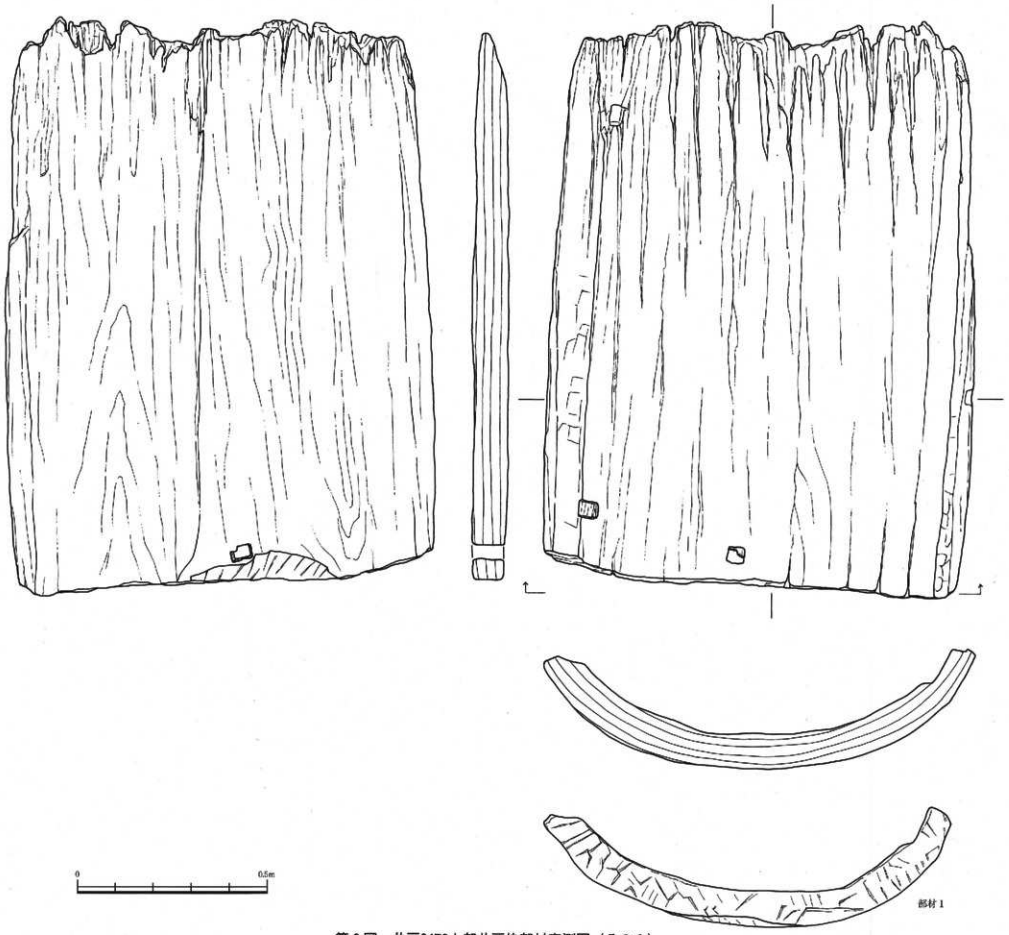
第1表　井戸枠転用船材計測表



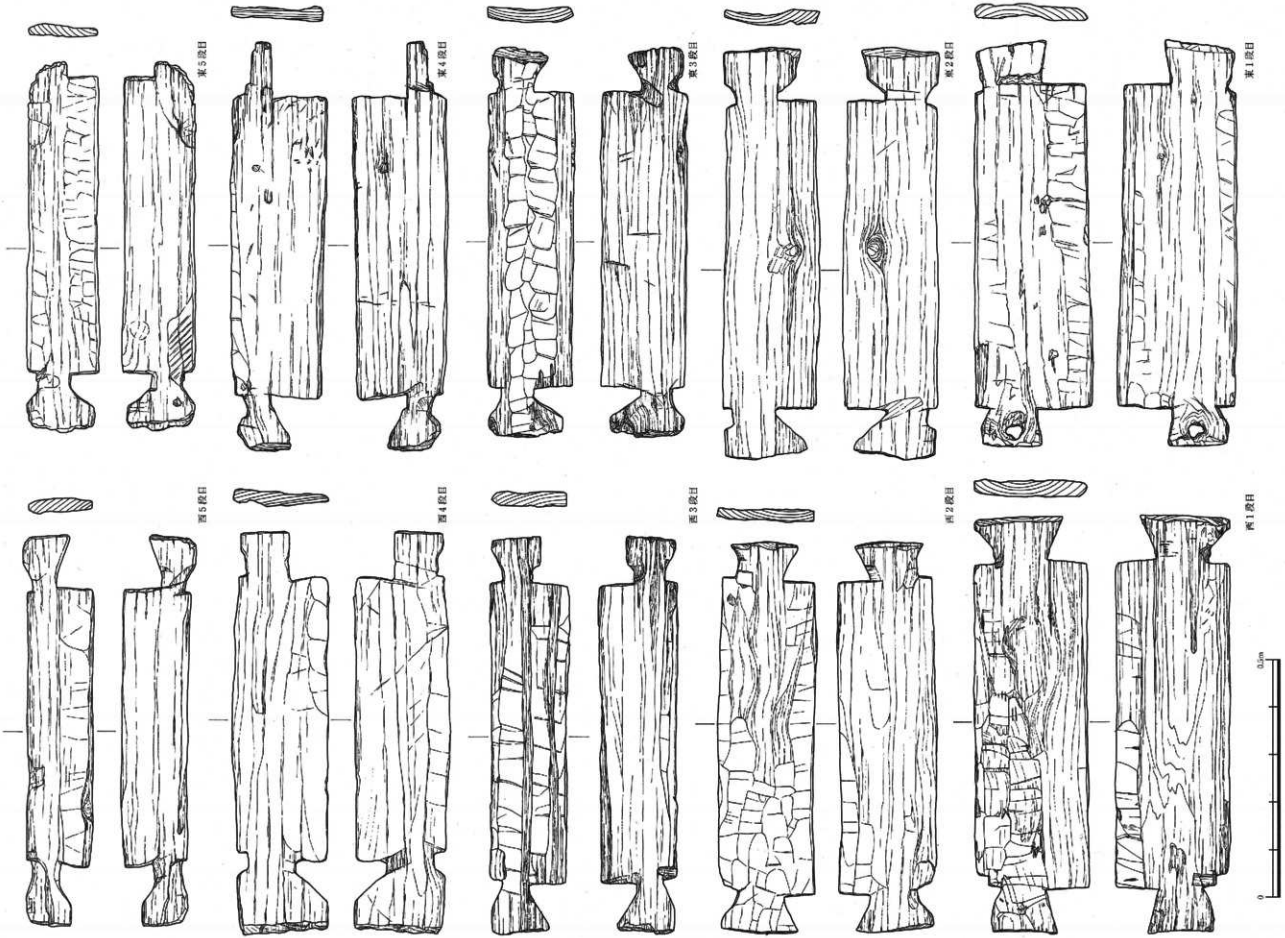
第6図　井戸2476平面図・立面図



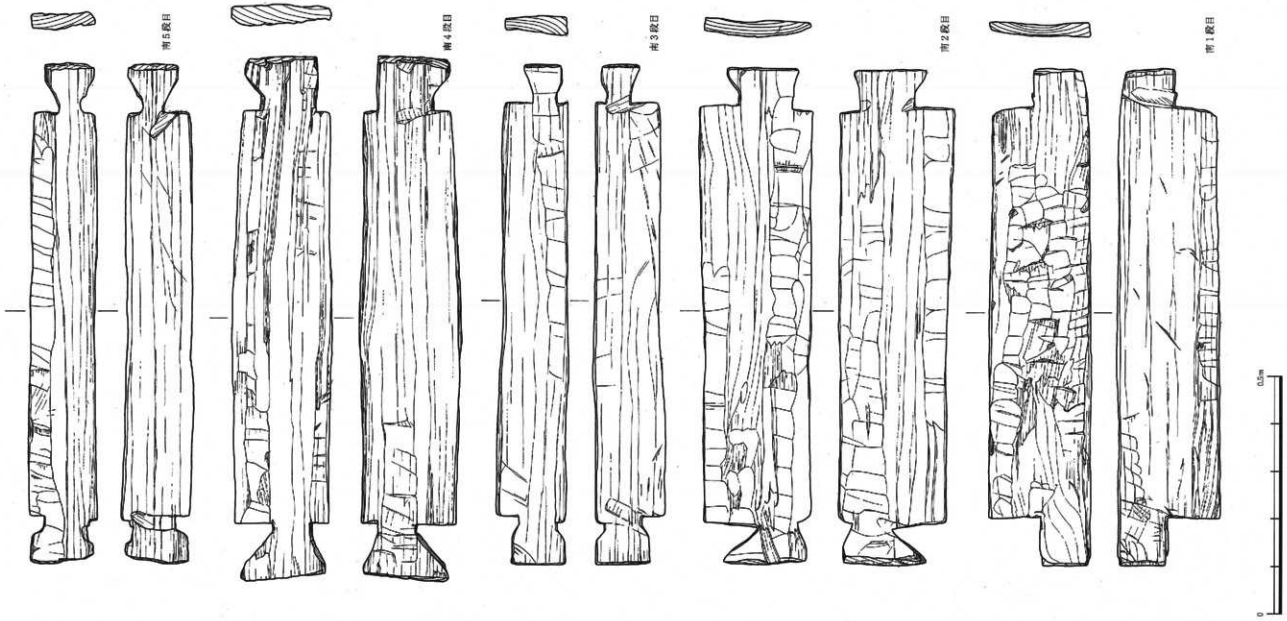
第７図　井戸2476上部井戸枠部材実測図（その１）



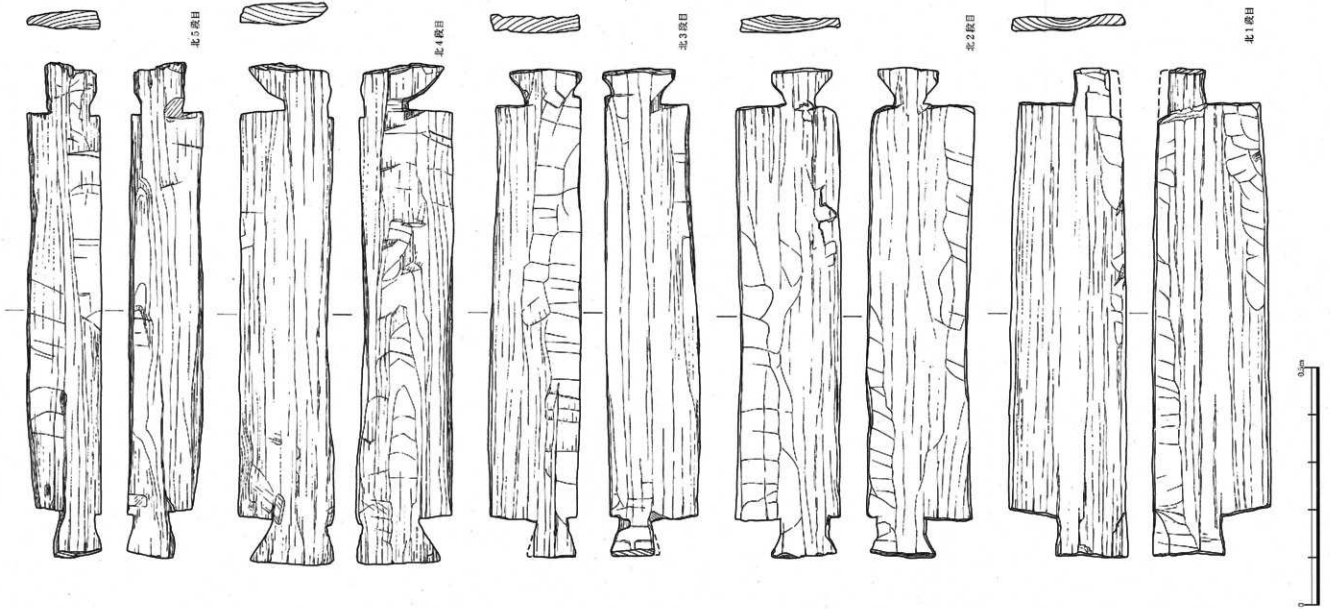
第8図　井戸2476上部井戸枠部材実測図（その2）



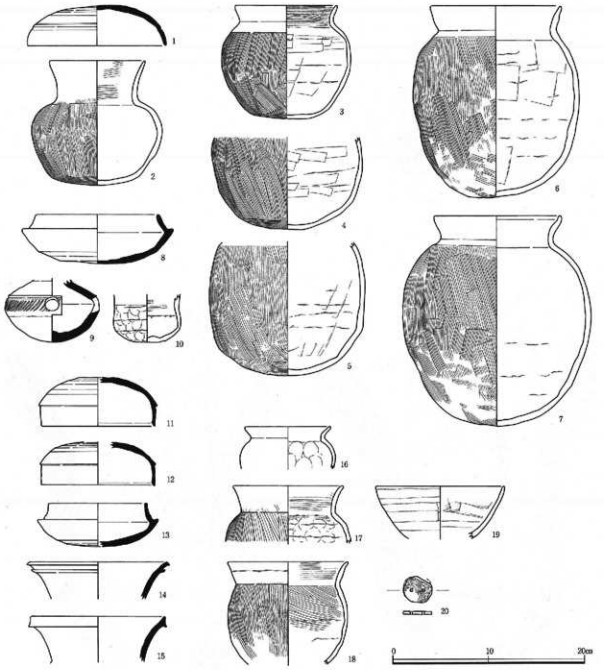
第９図　井戸2476井桁部材実測図（その１）（※各部材左側が外面）



第10図　井戸2476井桁部材実測図（その２）（※各部材左側が外面）



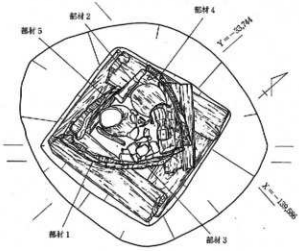
第11図　井戸2476井桁部材実測図（その３）（※各部材左側が外面）



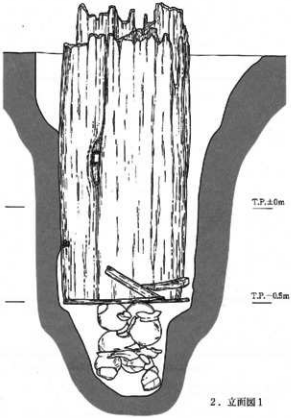
第12図　井戸2476出土遺物実測図

井戸2549は木枠を持つ井戸で、ｉ５区の南東谷の縁辺で検出した。（第13図、写真図版６、７）井戸枠上部の検出レベルはT.P.＋90㎝前後で、井戸枠底部のレベルはT.P.－50㎝である。掘方の平面形はややいびつな楕円形で、長径が1.6ｍ、短径が1.4ｍである。井戸枠（第14、15図）は船材を転用して使用しており、２枚の舷側板と３枚の船底材を断面扇型に組み合わせて作られている。使用されている船材の一覧は第１表である。部材２は舷側板で、船底部と合体させる為の穴が４ヶ所残存している。

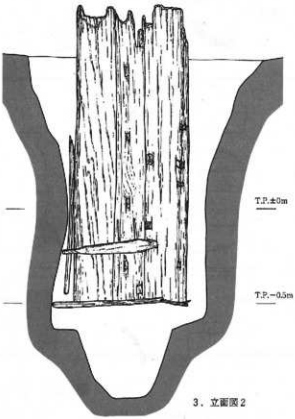
第13図３は井戸2549の立面図、南側の部材１と３をはずした状態の立面図である。内部には棒状の角材でつっぱりがしてあり、つっぱりの先端が枠外部に飛び出していた。筒状に組み合わされた井戸枠は、70㎝四方の正方形土坑に『井』の字の形に板材を並べ敷きこんだ上に載せられて



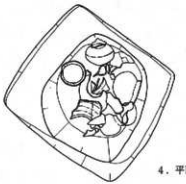
1．平面図



2．立面図1

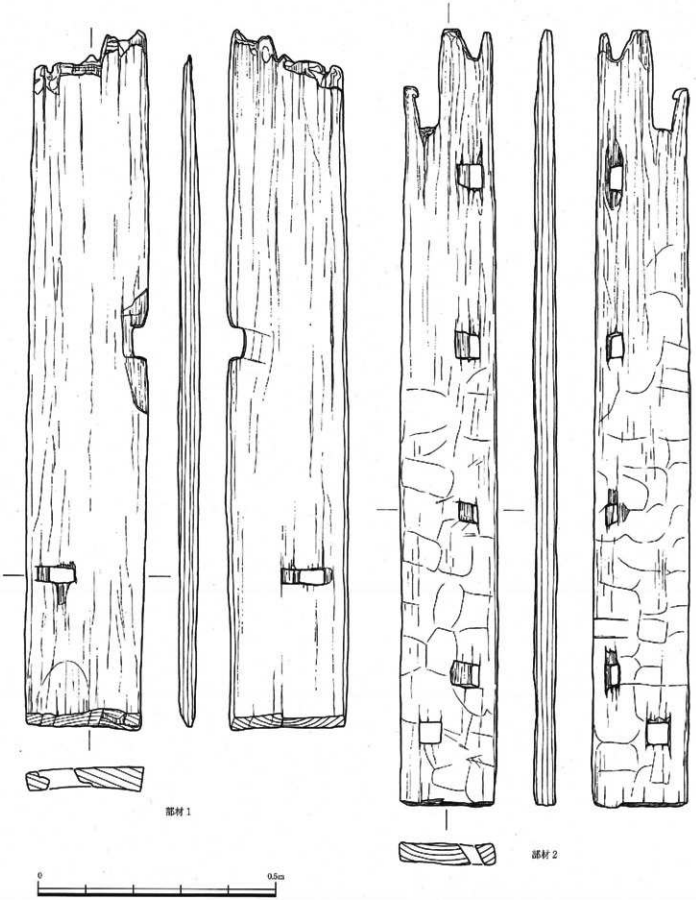


3．立面図2

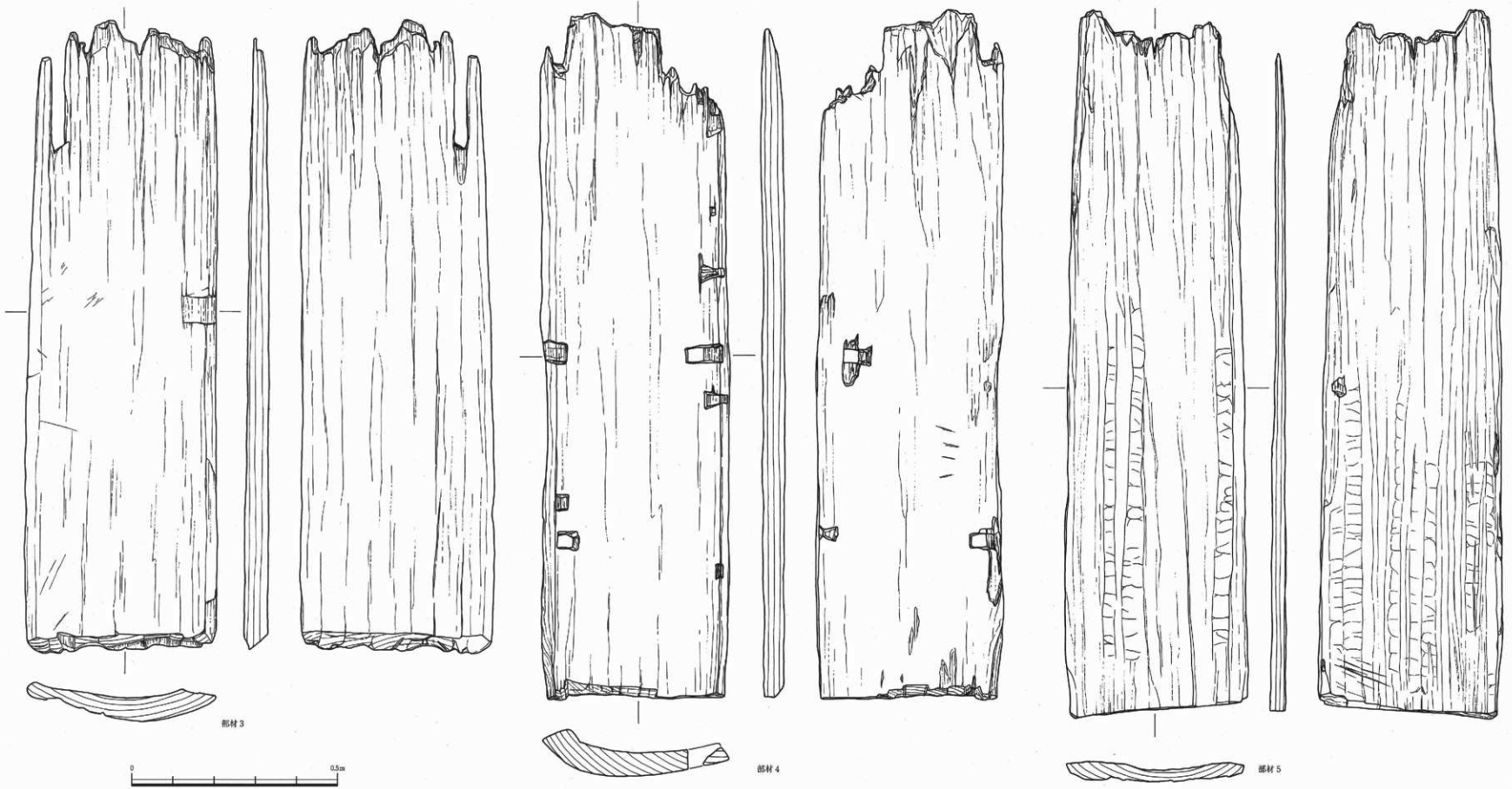


4．平面図

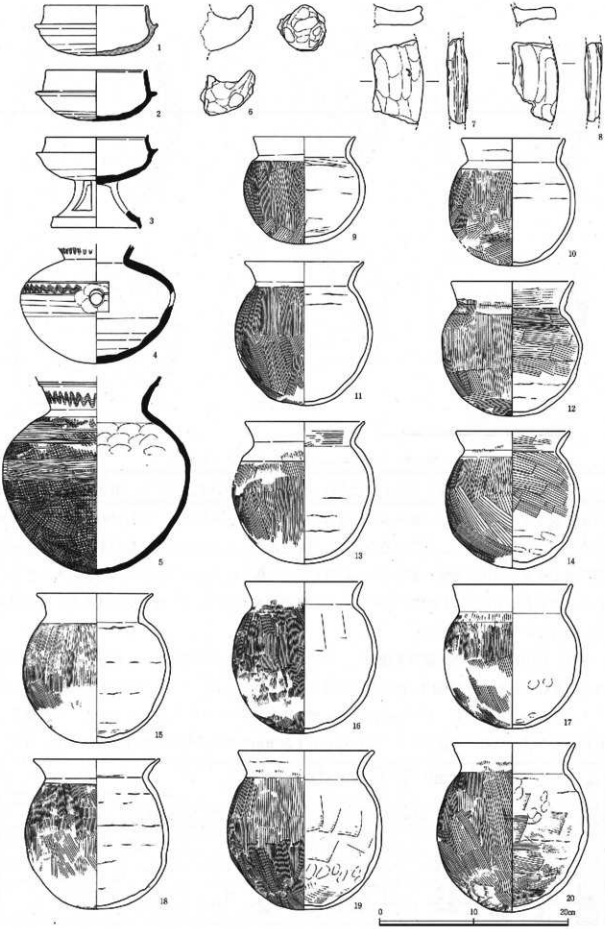
第13図　井戸2549平面図・立面図



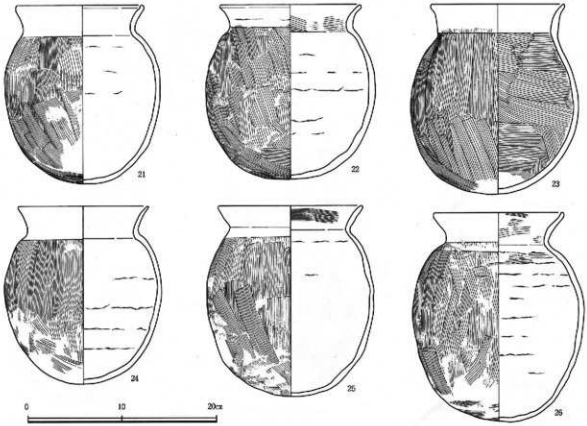
第14図　井戸2549井戸枠部材実測図（その１）



第15図　井戸2549井戸枠部材実測図（その２）



第16図　井戸2549井戸遺物実測図（その１）



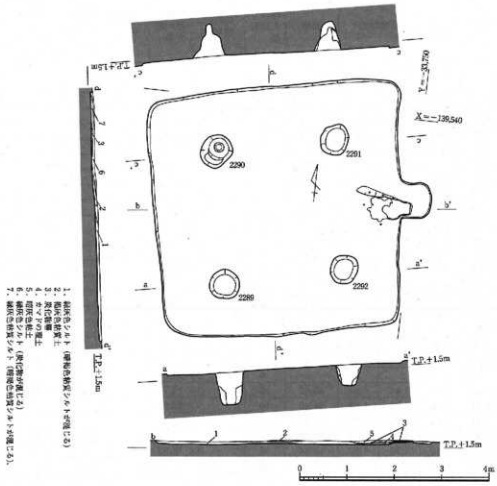
第17図　井戸2549出土遺物実測図（その２）

いた。北側は井戸枠を安定させるために板材がもう一枚敷き込まれている。敷き込まれていた板材は、長さ68cm前後、幅15～20cm前後、厚みは５～８cm前後を測る。この板材の下層に直径50cm程度のいびつな穴があり、大半の遺物はこの穴から出土した。第13図４は板材を取り上げた後の遺物出土状況平面図である。遺物の出土状況をみると板材が置かれる前に埋め込まれたと考えられる。湧水もほとんどない状態で井戸としての機能が果たせたのかと疑問点は残るが、他に用途がないことから井戸としておく。

第16、17図は2549の出土遺物実測図で、１、６、７は掘方からの出土、１の杯身は瓦質焼成である。２、３、９は井戸枠内、他は井戸底部から出土している。４、５の須恵器口縁部は打ち欠いたように欠けていたが、10～26の中小丸底甕は特に目立った打ち欠きはなかった。この他井戸枠内からひょうたん、木錘が出土している。出土遺物から井戸の使用時期は５世紀中頃、後半に

建物No.	一辺の長さ 長辺	一辺の長さ 短辺	長辺×短辺	最大深さ	平面形	長辺の方位	カマド位置	備考
	m	m	㎡	cm				
1693	5.2	5.2	27.04	8	隅丸方形	N－6°－W	東	カマドの側壁に板が打ち込まれている。
2494	(6.7)	6.6		15	長方形	N－10°－W	北	カマドの支脚に須恵器杯身が使われている。
2440	6.3	5.7	35.91	7	隅丸長方形	N－20°－W		
3217	5.2	5.2	27.04	18	隅丸方形	N－25°－W		
3333	6.8	6.7	45.56	14	方形	N		
3770	5.2	5	26	13	隅丸方形	N－40°－W		
3787	8.5	6.8	57.8	15	長方形	N		
3818	6.2	5.7	35.34	19	隅丸長方形	N－22°－W		
3840	5.8	5.7	33.06	10	隅丸方形	N－5°－W		
3888	6.2	6.2	38.44	16	隅丸方形	N－41°－W		
4040	(3.7)	(2.0)		10				

第２表　竪穴住居一覧



第18図　竪穴住居1693平面図・断面図

は廃絶したと推定される。

竪穴住居は第11面で11棟検出した。（写真図版８～10）第２表はその一覧である。住居の平面形は方形とわずかに隅丸方形になるものとに二分できる。平面形が方形の住居は長辺の方位がほぼ正南北をとり、長辺×短辺により算出した面積は40㎡を超えるものが２棟含まれる。これらの竪穴住居は上層からの掘り込みが多く、内部構造ははっきりしない。主柱穴、カマドなどがある程度判明したのは1693のみである。

竪穴住居1693（写真図版８）は他の竪穴住居跡と違い、上層からの掘り込み、カクランがなく主柱穴やカマドが検出できた。第18図は1693の平面図、断面図である。主柱穴は４箇所、いずれも直径60㎝前後、検出深さは50㎝前後を測る。かまどは北辺中央に作られており、わずかに側壁の高まりを検出したのみにすぎないが、側壁には直径２㎝ほどの細い杭が等間隔に打ち込まれているのが認められた。住居床面からは甕の体部片などが出土しているが、年代決定の決め手になる遺物は出土していない。しかし竪穴住居1693は、ＴＫ23段階の須恵器が出土した竪穴住居2484を切り込んでいることから、それ以後の時期の構築と考えられる。

掘立柱建物は第10面、第11面から合計34棟検出した。建物の番号は現地調査の段階で平面プランが判明したものから順に番号をつけており、整理段階で初めて平面プランが判明したものはそ

建物No.	規模	梁間平均	桁行平均	柱間平均		面積	検出した柱穴数	柱材の残存数	柱根の平均最大径	芯去材の有無	礎材を検出した柱穴数	礎板の状態	ワラ材を検出した柱穴数
				梁間平均	桁行平均								
	間	m	m	m	m	㎡	箇所	箇所	cm	本	箇所		箇所
1	3×4	4.99	6.97	1.66	1.74	34.72	14	13(底は4)	16.56				
2	3×4	4.60	6.69	1.53	1.67	30.75	14	11	17.41				
3	3×4	4.65	7.08	1.55	1.77	32.92	8	6	13.18				
4－北	3×3	4.18	5.17	1.39	1.72	21.56	16						9
4－南	3×3	4.14	4.39	1.38	1.46	18.15	16				2	B	
5－西	3×5	4.07	8.15	1.36	1.63	33.13	16	1	12.50				2
5－東	2×4	4.13	8.18	2.06	2.05	33.74	12						2
6	3×4	4.57	6.82	1.52	1.70	31.14	14						
7	3×5	4.92	8.52	1.64	1.70	41.88	16						7
8	3×4	4.86	6.95	1.62	1.74	33.72	14	2	12.85	芯去材2			
9	3×3	4.58	5.41	1.53	1.80	24.78	16	1	16.00		16	A	
10	3×4	4.61	6.74	1.54	1.68	31.05	14	1	15.30		1	D	
11	3×5	4.73	8.46	1.58	1.69	40.02	16	1	15.20		3	C	
12	2×3	4.41	5.06	2.20	1.69	22.29	11				10	A	
13	3×4	5.03	7.40	1.68	1.85	37.20	14	2	14.35				
14	3×3	4.75	5.39	1.54	1.83	25.58	12				12	A	
15	2×3	4.00	5.85	2.00	1.95	23.40	12				12	B	
16	—	—	—			—	8	3	21.07		7	A	
17	4×5	5.64	7.70	1.41	1.54	43.43	18	1	12.70		3	B	
18	3×4	5.17	6.76	1.72	1.69	34.95	14	1	12.50				
19	2×3	3.37	4.81	1.69	1.60	16.19	12				8	C	
20	3×5	5.38	9.25	1.79	1.92	49.77	12				4	B	
21	2×3	3.51	4.12	1.76	1.37	14.44	12	4	16.63	芯去材4			
22－北	3×3	4.20	4.55	1.40	1.52	19.09	15						
22－南	2×3	3.35	4.73	1.67	1.58	15.82	12				4	B	
23	2×4	4.00	6.28	2.00	1.57	25.10	15				9	C	
25	3×4	5.51	7.00	1.84	1.75	38.54	19				13	A	
28	3×5	5.58	8.12	1.86	1.62	45.28	16						
29	—	—	—	1.79	2.21	—	12						
30	2×4	4.60	6.46	2.30	1.61	29.69	15	1	17.20		3	B	
31	2×2	2.51	3.26	1.25	1.63	8.17	9				4	C	
32	2×2	3.01	3.47	1.50	1.74	10.43	8	1	15.50		4	C	
34	2×3	4.07	4.82	2.03	1.61	19.59	10						
35	2×4	4.09	6.23	2.05	1.56	25.48	15				7	C	

※礎板の状況
A：柱穴の底一面にに板材が１枚整然と敷き込まれている。
B：柱穴の底に部材が一枚敷き込まれている。
C：一つの柱穴に複数枚の板材が積み重ねたり、並べたりして用いられている。
D：柱の根固めに部材が据えてある。

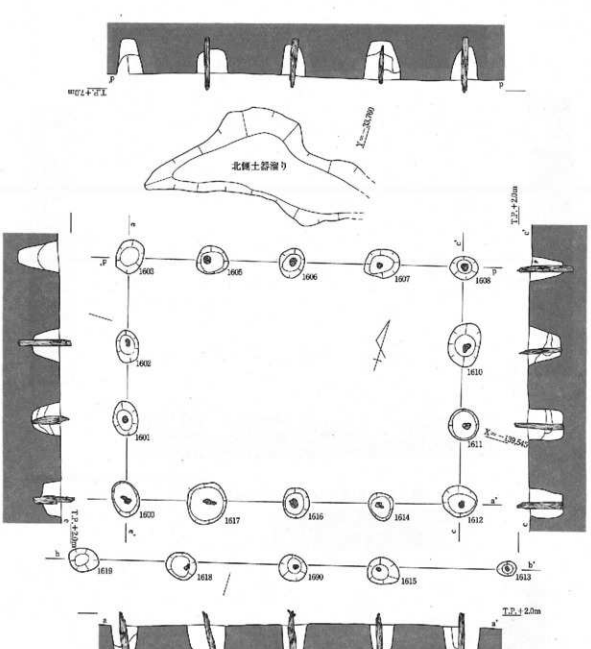
第３表　掘立柱建物一覧

の後に番号をつけた。また現地調査では１棟の建物と考えていたものが整理段階で２棟の建物に分かれたものは、５－東、西というように区別した。

第３表は判明した掘立柱建物の平面プラン、規模、面積、検出した柱穴、また柱材、礎板、ワラ材などの出土数、また出土した柱の法量及び形状、礎板の出土状況等の基礎的データ一覧である。

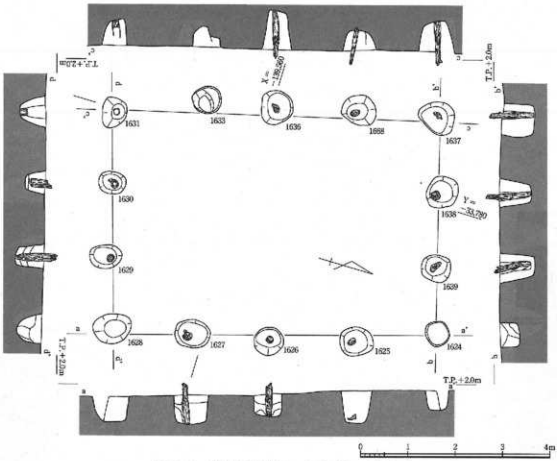
以下は各掘立柱建物の特徴について記述する。

掘立柱建物１、２（写真図版11、12）は第10面で検出した2棟とも３間×４間の平面プランを有する建物である。（以下は建物１、２と呼称する。）建物１はｅ６、７区、建物２はｆ８、９、ｇ

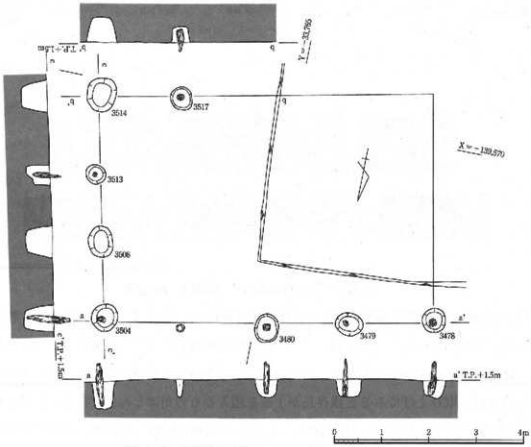


第19図　掘立柱建物１　平面図・断面図

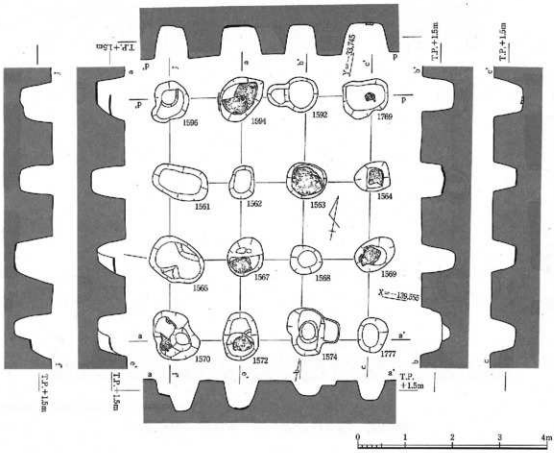
８、９区で検出した。第19図は建物１の、第20図は建物２の平面図、断面図である。建物１では主柱穴14箇所の内13箇所から、建物２では主柱穴14箇所内11箇所から柱材出土した。これらの柱の中には遺構面から30cmほど上部に、柱穴内では地中70cm深く残存しているものもある。とくに建物１の柱材は取り上げてみると残存長が１ｍを超えるものがほとんどである。柱材の樹種は建物１、２ともに全てヒノキである。建物１では南面に庇列も検出しており、庇列の柱穴からも４本の柱がみつかっている。また北側には建物に沿うように浅い土器溜まりを検出しており、ここ



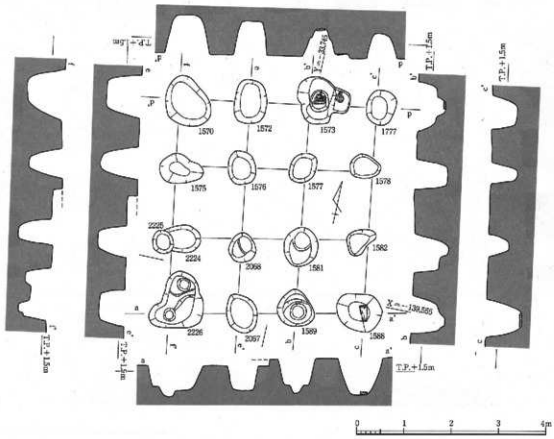
第20図　掘立柱建物２　平面図・断面図



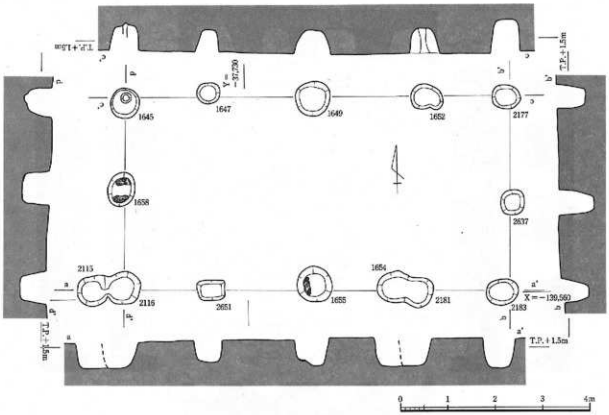
第21図　掘立柱建物３　平面図・断面図



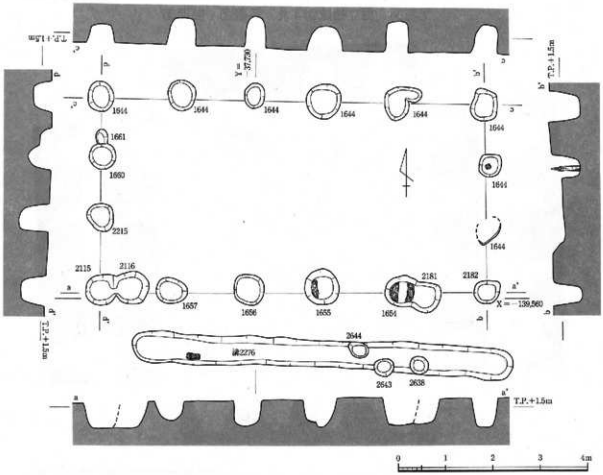
第22図　掘立柱建物４北　平面図・断面図



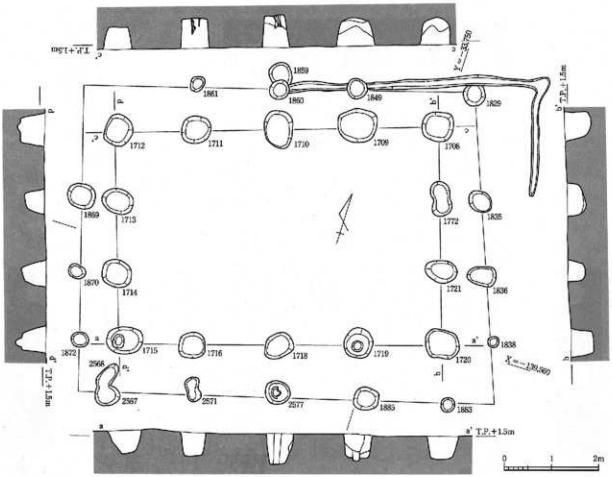
第23図　掘立柱建物４南　平面図・断面図



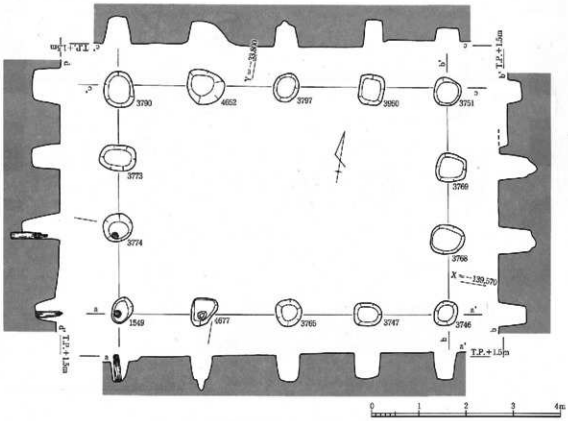
第24図　掘立柱建物５東　平面図・断面図



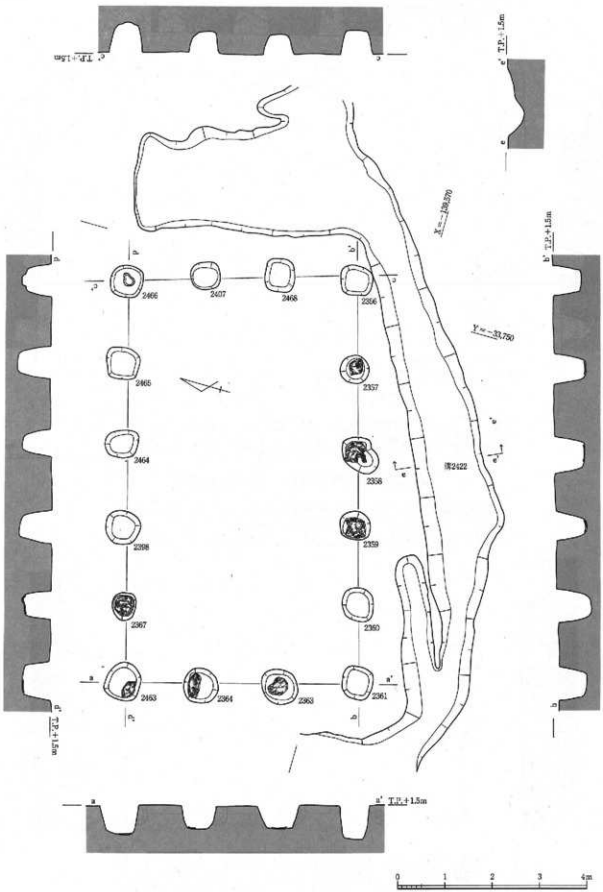
第25図　掘立柱建物５西　平面図・断面図



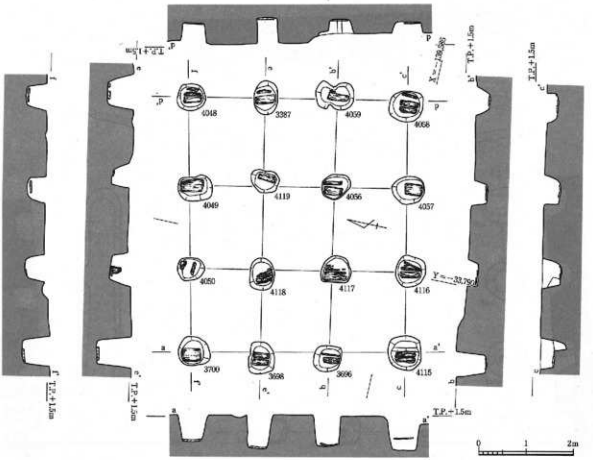
第26図　掘立柱建物６　平面図・断面図



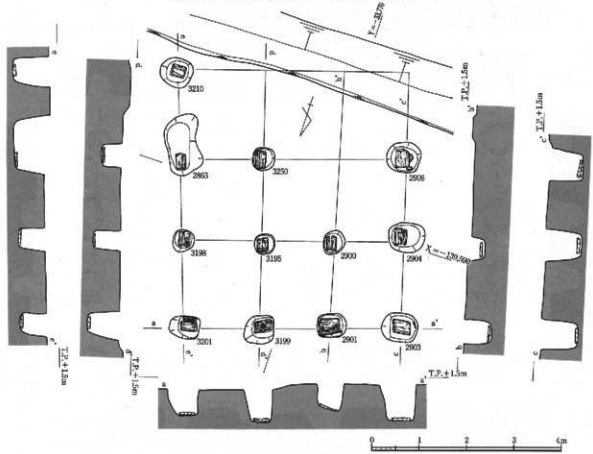
第27図　掘立柱建物８　平面図・断面図



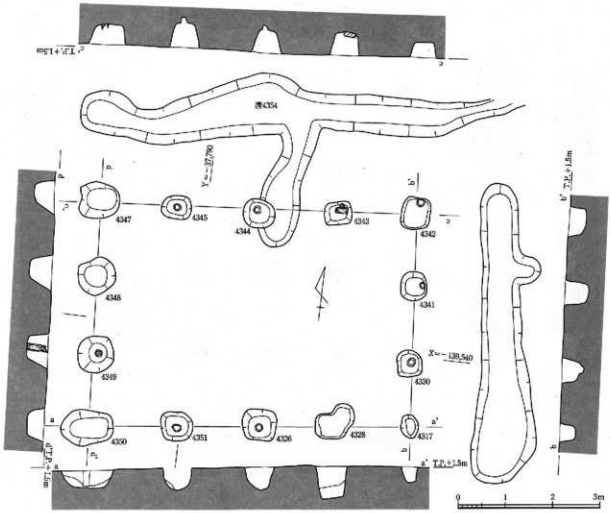
第28図　掘立柱建物７　平面図・断面図



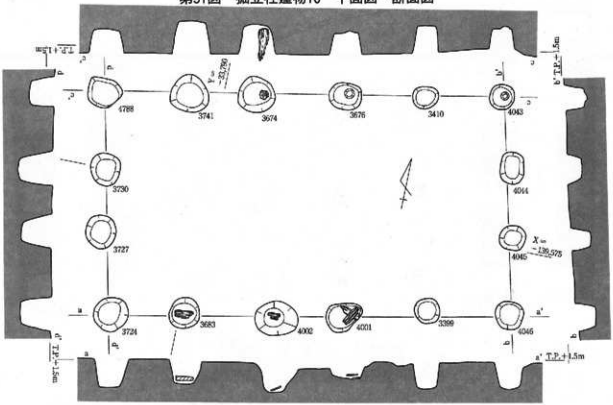
第29図　掘立柱建物９　平面図・断面図



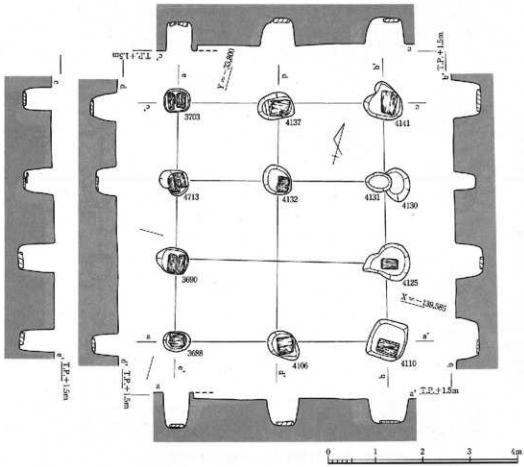
第30図　掘立柱建物14　平面図・断面図



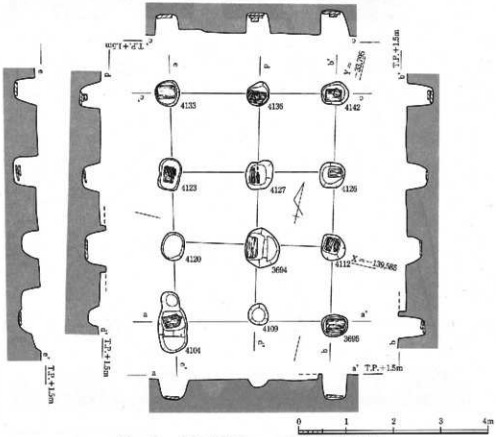
第31図　掘立柱建物10　平面図・断面図



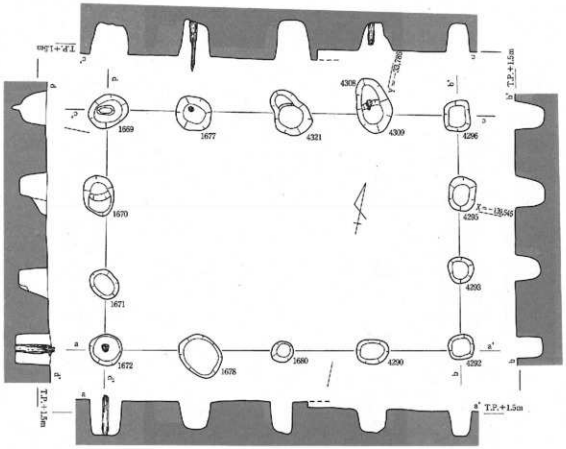
第32図　掘立柱建物11　平面図・断面図



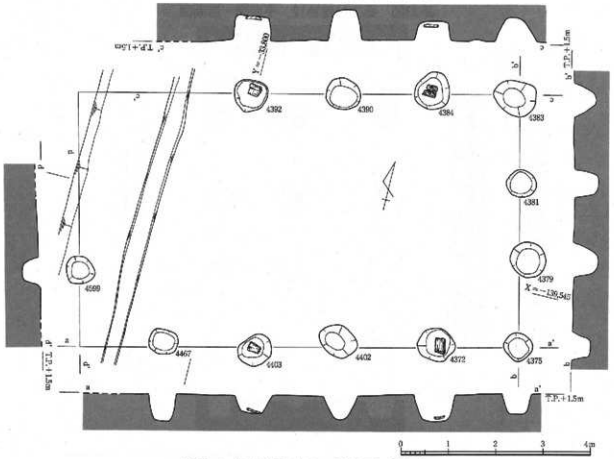
第33図　掘立柱建物12　平面図・断面図



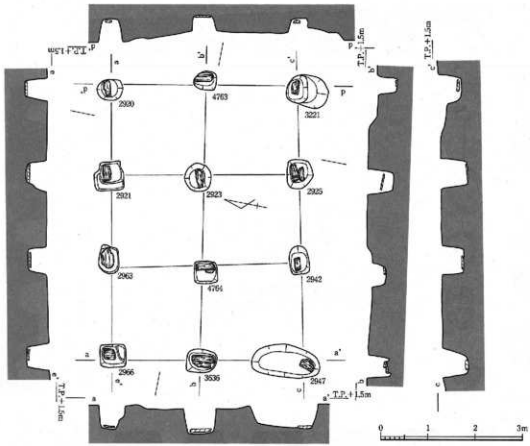
第34図　掘立柱建物19　平面図・断面図



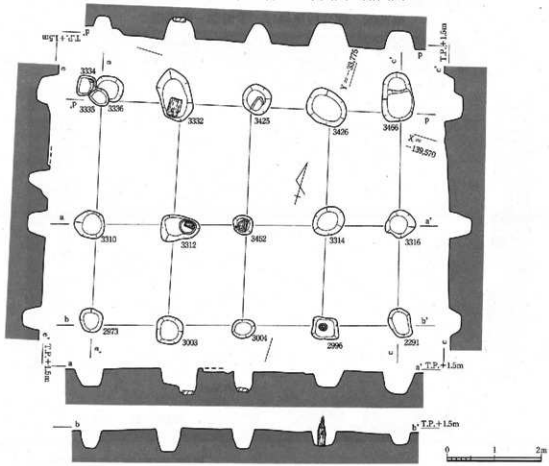
第35図　掘立柱建物13　平面図・断面図



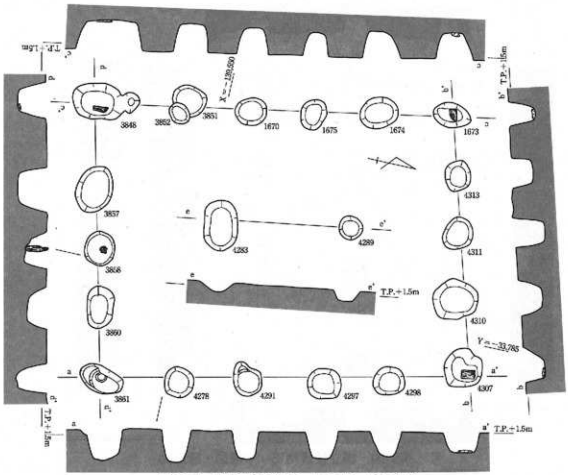
第36図　掘立柱建物20　平面図・断面図



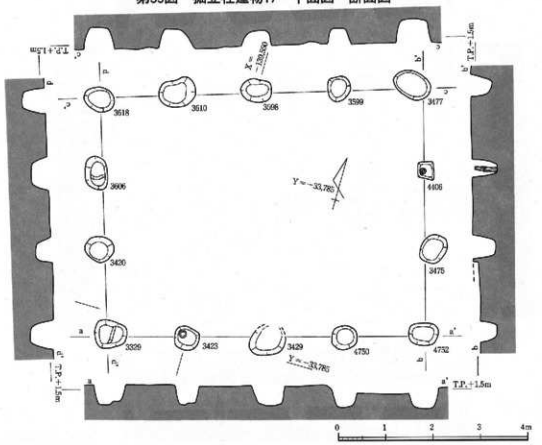
第37図　掘立柱建物15　平面図・断面図



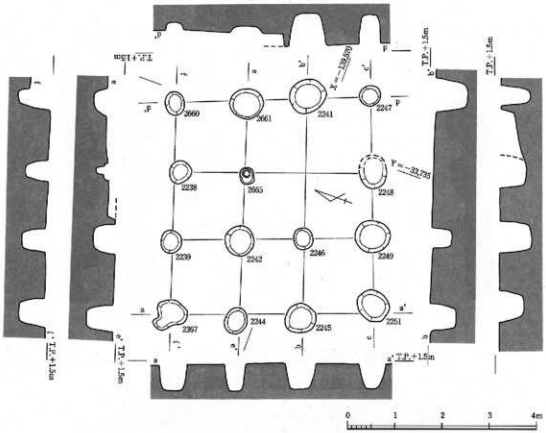
第38図　掘立柱建物30　平面図・断面図



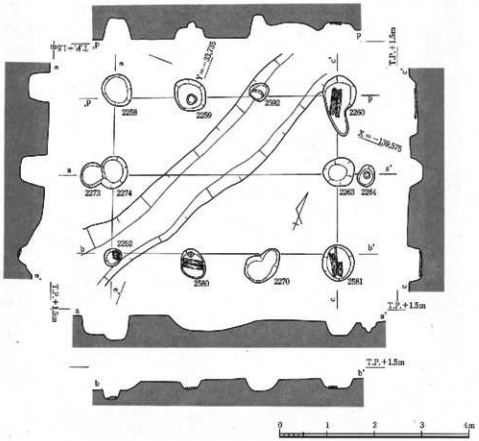
第39図　掘立柱建物17　平面図・断面図



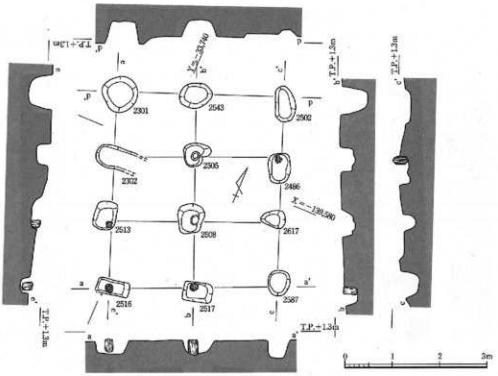
第40図　掘立柱建物18　平面図・断面図



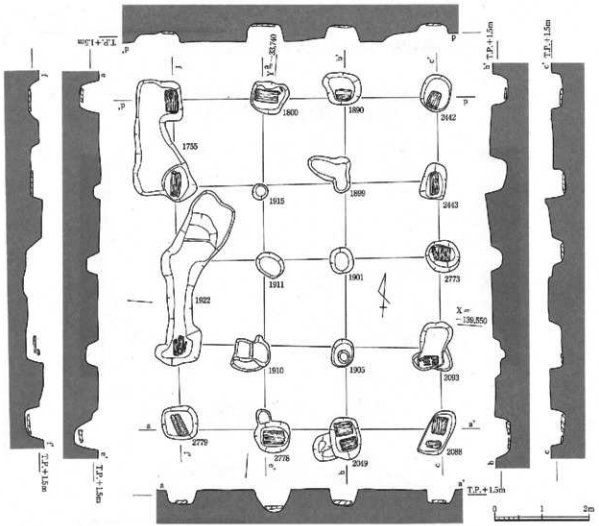
第41図　掘立柱建物22北　平面図・断面図



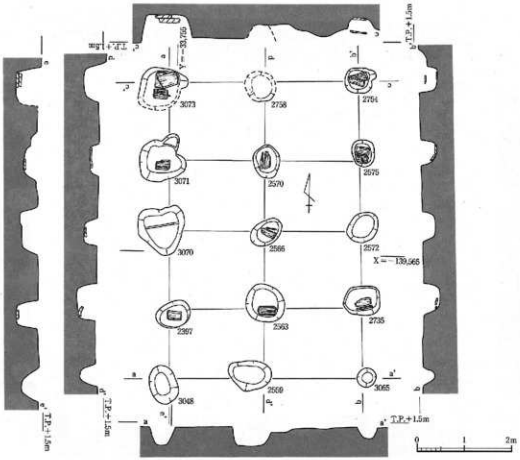
第42図　掘立柱建物22南　平面図・断面図



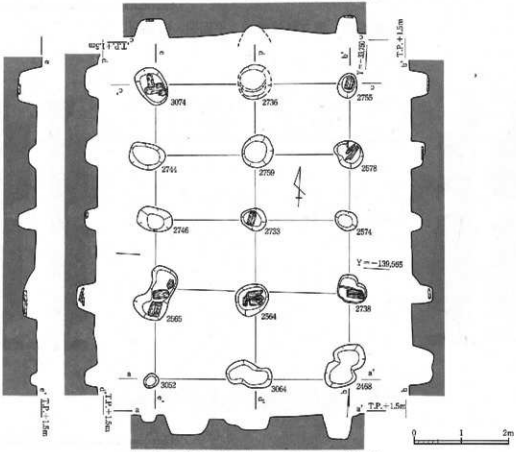
第43図　掘立柱建物21　平面図・断面図



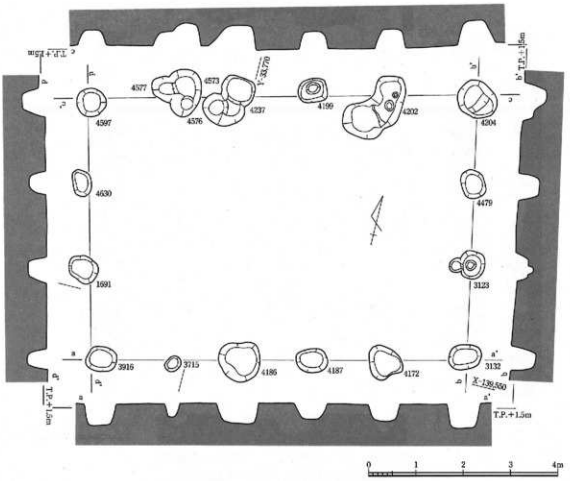
第44図　掘立柱建物25　平面図・断面図



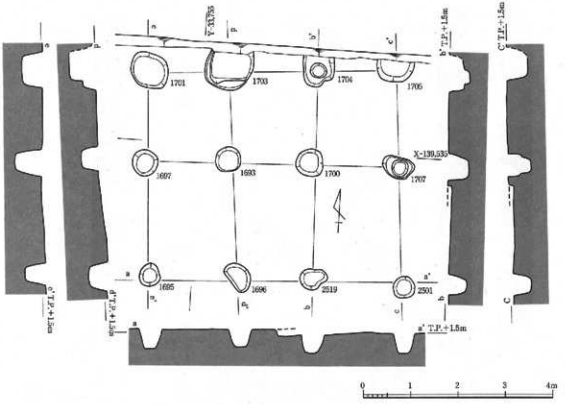
第45図　掘立柱建物23　平面図・断面図



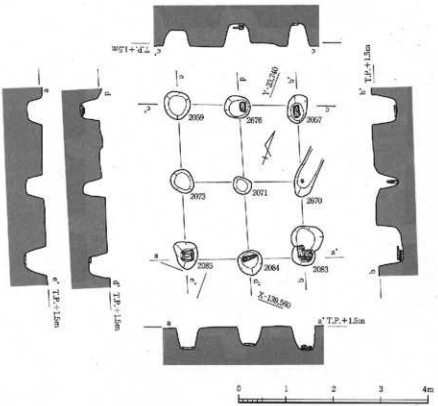
第46図　掘立柱建物35　平面図・断面図



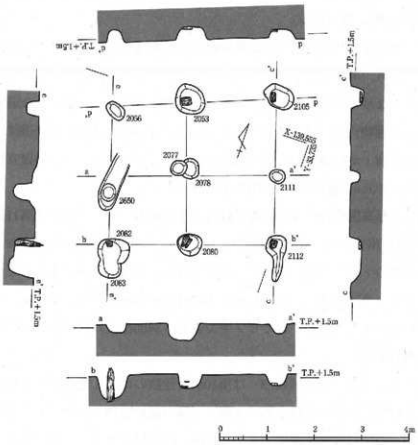
第47図　掘立柱建物28　平面図・断面図



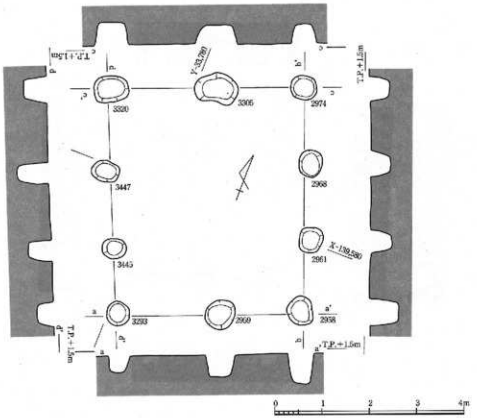
第48図　掘立柱建物29　平面図・断面図



第49図　掘立柱建物31　平面図・断面図



第50図　掘立柱建物32　平面図・断面図



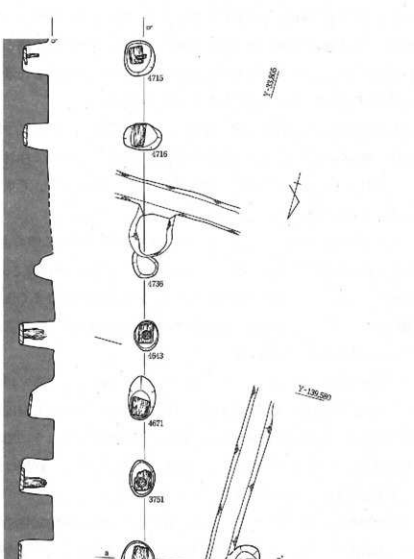
第51図　掘立柱建物34　平面図・断面図

からは多量の土器が出土した。第59図12～21はその出土遺物実測図の一部である。出土した須恵器はＴＫ43～209段階に相当する。

現地調査で、建物１、２の柱の上部は第10面上部を覆っている灰色粘土（砂混じり）層上面から発見していたため、第10面まで掘下げの早い段階で、掘立柱建物の平面プランが判明していたが、建物床面までほりさげる段階で内部構造や上部構造を復原できるような遺構、遺物は検出していない。しかし建物内外の埋土を洗浄したところ、土中から多量の滑石製の臼玉を発見した。出土数は掘立柱建物１からは474点、掘立柱建物２からは359点で、その他掘立柱建物１からはガラス小玉、建物２からは紡錘車、双孔円板を発見している。

掘立柱建物３（写真図版12）は第10面で柱の上部を検出したが、柱穴は第11面で検出した。ｇ7、ｈ7区からの検出である。第21図は建物３の平面図、断面図である。建物南西のコーナー部は第１次試掘調査のトレンチ内にかかり、このとき発見された柱根とあわせて９本の柱が残存していることになる。今回の調査で出土した６本の柱の樹種鑑定結果によると、柱穴3480から出土した柱のみコウヤマキで、他はすべてヒノキである。3480出土の柱は芯去材で根元にくびれの加工があり、転用材と思われる。

掘立柱建物４南、４北（写真図版13）は第10面で建物のほとんどの柱穴を検出していたが、第11面で検出した柱穴とあわせてはじめて３間×３間の総柱建物が南から北に建替えられたことが判明した。第22、23図は建物４南、４北の平面図、断面図である。２棟合わせて平面プランをみると３間×６間になるが、柱穴1570－1572－1573－1777ラインを境にして北側の柱穴は底にワラ



第52図　掘立柱建物16　平面図・断面図

材をむしろ状に敷きこんでいる例がみられるのに対し、南側柱穴は礎板を敷きこんだ柱穴を２か所検出し、ワラ材は検出していないこと、また建物を柱穴1570－1572－1573－1777ラインを境にして３間×３間に分割すると、北側の建物のほうが桁行柱間平均寸法は広くなっていることから、南から北に建替えが行われたと判断した。柱穴1570－1572－1573－1777の平面プランは南北に長い平面楕円形であったが、これは建替えに際し再度利用されたためと考えている。

掘立柱建物５（写真図版13）はｆ３、４区、ｇ３、４区で検出した。建物５も建物４と同様第10面でほとんどの柱穴を検出していたが、第11面で検出した柱穴と合わせて初めて２間×４間の建物（建物５東）が３間×５間（建物５西）の建物に建替えられたことが判明した。第24、25図は建物５東、西の平面図、断面図である。建替えの順番は南東コーナー部の柱穴2182が2183を掘り

込んでいることから、ほぼ同じ面積ながら柱数を増やして2間×4間の建物が3間×5間に建て替わったことが判る。この時柱穴1649、1655は再利用している。建物5は東側も西側も2棟ともに柱穴底にワラ材を敷きこんでいる例がみられた。建物南側にそって検出した溝2276からはTK10段階に比定できる須恵器杯蓋と共に木製の下駄を検出している。

掘立柱建物6（写真図版13）は3間×4間の建物で、f5、6区、g5、6区で検出した。第26図は建物6の平面図、断面図である。全ての柱穴を第11面で検出しており、柱材は出土していない。平面プランでは主柱穴をとりまくようにやや規模の小さい柱穴があり、北東コーナー部で検出した雨落溝とともに屋根の規模を知りうる資料となるかもしれない。

掘立柱建物7（写真図版13）はg5、6区、h6区で検出した3間×5間の大型建物である。第28図は建物7の平面図、断面図である。ほとんどの柱穴が直径70㎝、検出深さ60㎝前後を測る。柱穴底にワラ材が敷きこまれている例が7箇所みられた。建物南側を取りまくように位置する溝2422から多量の遺物が出土した。第58図1～21は出土遺物実測図の一部である。出土した須恵器は須恵器編年MT15～TK10段階に相当する。

掘立柱建物8（写真図版14）はg10、g1、h10、h1区で検出した3間×4間の建物である。第27図は建物8の平面図、断面図である。第10面から検出した柱穴1549、3774は柱材が残存していた。この2か所の柱穴から検出した柱はどちらも断面が多角形になるように加工が施された芯去材で、転用された部材と考えられる。残存長は2本とも約70㎝である。樹種は他の建物の柱がほとんどヒノキであるのに対し、コウヤマキが用いられている。

掘立柱建物9（写真図版15）はh9、i9、10区で検出した3間×3間の総柱建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第29図は建物9の平面図、断面図である。全ての柱穴から礎板が出土し、柱穴4118からは礎板と柱がセットで出土した。礎板は長方形の板材を使用し、礎板の長辺をおおむね東西方向にそろえて整然と据えられている。柱材の樹種はヒノキである。

掘立柱建物10（写真図版21）はd9、10、e9、10区で検出した3間×4間の建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第31図は建物10の平面図、断面図である。柱穴4349からは柱の樹皮のみ検出した。柱穴4343には礎板を検出したが、この礎板は丸太材を半裁して平らな面を伏せて使用しており、柱の下に敷きこんだのではなく柱の根固めのために用いられたものと思われる。建物北面に沿うように存在する溝4354から多量の遺物が出土した。第59図1～7は出土遺物実測図の一部である。出土した須恵器は須恵器編年TK10～43段階に相当する。

掘立柱建物11（写真図版21）はh9、10区で検出した3間×5間の建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第32図は建物11の平面図、断面図である。柱穴3674からは柱材、柱穴3683、4002、4001からは礎板を検出した。柱穴4001の礎板は2枚重ねられた状態で出土したが、下に敷きこまれていた板材は柄を欠損した櫂である。柱材の樹種はヒノキである。

掘立柱建物12と掘立柱建物19（写真図版16、19）はi10区から重複して検出した共に2間×4間の総柱建物である。すべての柱穴を第11面で検出しており、柱穴の切りあい関係からみて建物

12から建物19にやや東に位置をずらして建替えられたと考えられる。第33、34図は建物12、19の平面図、断面図である。2棟の建物の礎板は分厚く柱穴の底一面に敷き込まれているものがほとんどであるが、建物19では小さい板材を積み重ねて複数枚の礎板を使用している例もあり、これは柱の高さ調節をしたと考えられる。

掘立柱建物13（写真図版21）はｅ9、10区で検出した3間×4間の建物である。一部の柱を第10面で検出していたがすべての柱穴を検出し、平面プランが確定したのは第11面である。第35図は建物13の平面図、断面図である。第10面で検出した柱穴のうち柱穴1677、1672からは遺構面より上部に残存する柱材を検出している。柱材の樹種はヒノキである。

掘立柱建物14（写真図版17）はｉ7、8区、ｊ7、8区で検出した3間×3間の総柱建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第30図は建物14の平面図、断面図である。検出した柱穴はいずれも断面がバケツ型で検出深さが80cm前後をはかり、全ての柱穴に非常に厚みのある礎板が敷き込まれていた。

掘立柱建物15（写真図版18）は2間×3間の総柱建物でｈ7、8区、ｉ7、8区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第37図は建物15の平面図、断面図である。建物15の柱穴埋土はほとんど遺物もブロック土も混じらない灰色粘土であり、ベース土との区別が非常に困難であった。すべての柱穴から礎板が出土している。

掘立柱建物16（写真図版20）はｈｉ1区で検出した大型建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第52図は建物16の平面図、断面図である。建物の大半は調査区外になるが、長辺は6間以上になる可能性がある。建物16では柱穴4736を除く全ての柱穴から礎板が出土した。また柱穴4705、3751、4643、4715からは礎板の上に柱材が残存していた。用いられていた礎板はいずれも厚さが8cm前後をはかり、柱材の直径は平均20cmを超え、これは検出した建物の中で最も規模が大きいものである。柱は礎板の中心に据えられており、柱材の樹種は4715がコウヤマキで他はすべてヒノキである。

掘立柱建物17（写真図版21）は調査区唯一の4間×5間の建物で、ｅ、ｆ9区から検出した。第39図は建物17の平面図、断面図である。平面図を検討した結果屋内に2か所棟持柱があったと思われる。1ヶ所の柱穴から柱が、3ヵ所の柱穴から礎板が出土したが、そのうち柱穴3848の礎板は田下駄を転用したものである。

掘立柱建物18（写真図版14）はｇ8、9区、ｈ8、9区で検出した3間×4間の建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。第40図は建物18の平面図、断面図である。検出した柱穴の一箇所から柱材が出土した。樹種はヒノキである。

掘立柱建物20（写真図版21）はｅ1、10区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第36図は建物20の平面図、断面図である。西側の一部柱穴が未検出であるものの図上の復原により3間×5間の建物になることが判明した。復原した面積は検出した建物の中で最も広い。4ヶ所の柱穴から礎板が出土した。これらの4ヶ所の礎板は、一つの加工痕のある板材を分割して礎板

に転用したものである。

掘立柱建物21（写真図版20）は２間×３間の総柱建物でｈ４,５区、ｉ４,５区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。４ヶ所の柱穴から柱材が出土したがその全ての柱はヒノキの芯去材が用いられていた。第43図は建物21の平面図、断面図である。平面図をみると柱材が残存していた柱穴の平面形は長方形で、それに対して柱が抜き取られている柱穴の平面形は不整形である。また他の建物と比べると建物の面積に対して用いられている柱材直径が大きい建物である。

掘立柱建物22南、北（写真図版20）の２棟の建物はｇｈ４区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第41図は建物22北、第42図は建物22南の平面図、断面図である。図上で検討した結果建物22北は３間×３間の総柱建物、建物22南は２間×３間で屋外棟持柱がつくことが判明した。建物22北の柱穴からは礎板も柱材も出土していない。建物22南では４箇所の柱穴から礎板が出土したが、そのうち柱穴2260、2581には焼けた角材が用いられていた。

掘立柱建物23、35（写真図版22）はｇ６区で重複して検出したとともに２間×４間の総柱建物である。すべての柱穴を第11面で検出した。建物全体が竪穴住居2440に、北側は建物６に、南半分は建物７にと合計４棟の建物と切りあい関係がある。建物23と35は平面プランが同じで、面積もほとんど変わらないので、位置をずらして建替えられたと思われるが、柱穴の切りあい関係はないので新旧関係はわからない。第45図は建物23、第46図は建物35の平面図、断面図である。柱穴の平面プランは規模、形状ともさまざまで、礎板の出土状況も一ヶ所に数枚用いられて積み重ねる、板の向きをそろえずばらばらにおいてある等多様性がある。

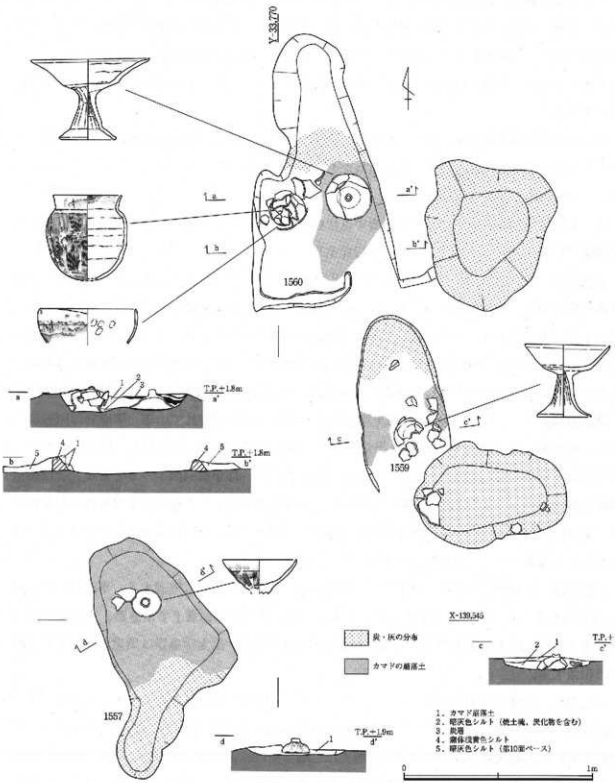
掘立柱建物25（写真図版23）は３間×４間の総柱建物でｅ４,５区、ｆ４,５区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第44図は建物25の平面図、断面図である。総柱建物であるが建物の外回りの柱穴のみ厚みのある板材が敷きこまれており、東柱にも礎板を敷きこんでいる総柱建物とは様相が異なる。

掘立柱建物28は３間×５間の建物でｅ７、８区、ｆ７区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第47図は建物28の平面図、断面図である。柱材、礎板は検出していなし又、柱穴の規模、大きさともにばらつきがあり、上面からカクランされた状況を示している。

掘立柱建物29は３間×２間以上の総柱建物でｄ６区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第48図は建物29の平面図、断面図である。礎板や柱は検出していない。

掘立柱建物30（写真図版14）は２間×４間の総柱建物でｈ８区、ｇ８区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第38図は建物30の平面図、断面図である。３ヶ所の柱穴から礎板を、１ヶ所から柱材を検出しているが、東柱の柱穴にあたる3312、3452では礎板が検出され、建物外回りの柱穴2996は礎板を用いず直接柱を立てていることなど他の倉庫建物とは様相が異なる。柱材の樹種はヒノキである。

掘立柱建物31、32はともに２間×２間の総柱建物で、ｆ４,５区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。第49、50図は建物31、32の平面図、断面図である。床面積10㎡前後の小型建物



第53図　カマド　平面図・断面図

でそれぞれの建物の柱穴で礎板や柱を検出しているが、建物の規模に比して柱の直径が小さいことはなく、礎板は積み重ねて使用されている柱穴もあり、整然としていない。

掘立柱建物34は２間×３間の建物でｈ８、９区、ｉ８、９区で検出した。すべての柱穴を第11面で検出した。礎板、柱は出土していない。

カマドは第10面で検出した（第53図）（写真図版24）。掘立柱建物１と２のあいだに北から南に1559、1559、1557となんでら３基検出した。掘立柱建物１、２を含む古墳時代後期の集落の共同炊事場であったと思われる。地面に直接固定して作られており、覆屋の存在は不明である。３基とも煙だしを北、南側に炊き口、灰をかき出した跡が残っており、土師器高杯を伏せて支脚に転用している。

カマド1560は最大幅80cm、長さは90cmをはかる。わずかに高さ８cmほどの窯体が残存している。カマド内部には土師器鉢と甕を二重に重ねたものと、土師器大型高杯が並んで出土している。支脚として用いられたものと思われる。

溝、土坑は多数検出しているが本概要では比較的まとまった量の遺物が出土し、出土遺物の器種構成が判明した土坑、溝などを中心に紹介する。

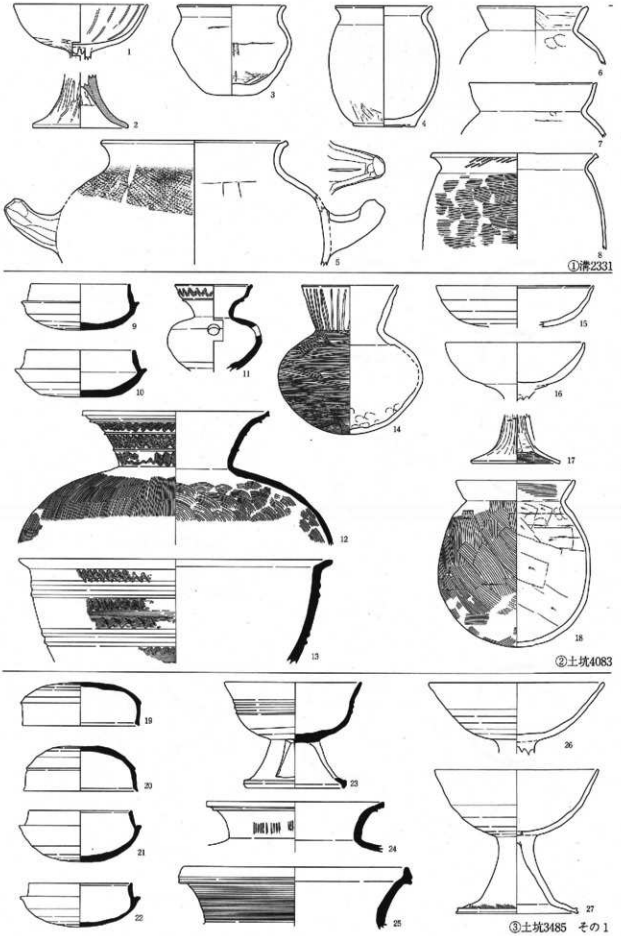
土坑2203（写真図版26の２）はｅ２、ｆ２区で検出した。東端は調査区外になる。平面形が隅丸長方形を呈し、検出幅約３ｍ、長さ3.5ｍ、検出最大深さ20cmを測る。埋土はおおむね二層に別れ下層の黒灰色粘質シルトから須恵器、土師器等の遺物が出土した。出土土器実測図の一部が第55図６～18である。特徴のある遺物は13、14の土師器椀で、整った形態をとり、外面に残る粘土痕から粘土を型にはめて成形した可能性がある。出土須恵器は須恵器編年ＴＫ23段階に相当する。

溝2331はｅ３、ｆ３区で検出、一部土坑2205に上層から切り込まれている。平面形は円弧状を呈し、検出幅1.5ｍ、長さ約13ｍ、検出最大深さ20cmを測る。埋土はおおむね二層に別れ上層の暗灰色粘質シルトから遺物が出土した。出土土器実測図の一部が第54図１～８である。２は黒色磨研土器高杯脚部、３、４は韓式系の平底の鉢、５は外面斜格子たたきで仕上げられた取手付き壺、７は口縁部が内湾しつつ上外方にのびる布留系の甕である。今回の調査区の中で最も古い様相を示す土器群である。須恵器は出土しなかった。

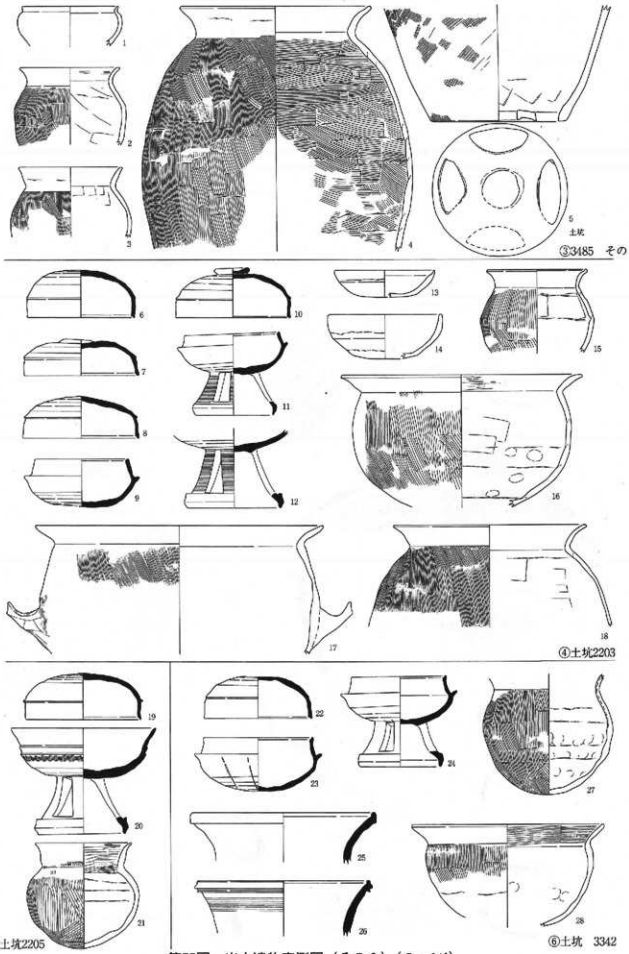
土坑2205（写真図版26の４）はｆ３区で検出した。溝2331の上層に位置する。平面形は直径約2.5ｍの円形を呈し、検出最大深さは15cmである。埋土は暗灰色粘質土で須恵器、土師器、鉱滓等が出土した。出土土器実測図の一部が第55図19～21である。出土須恵器は須恵器編年ＴＫ23段階に相当する。

土坑3485・3486（写真図版26の３）はｅ６、ｆ６区で検出した。掘立柱建物１の庇列の下層に位置する。平面形は共にややいびつな隅丸長方形で南北に近接して検出した。長辺約3.7ｍ、短辺約２ｍ、検出最大深さは10cmである。埋土は二層に別れ、須恵器、土師器、特に3485から大量の製塩土器が出土した。出土土器実測図の一部が第54図19～27、第55図１～５である。出土遺物には８、９の須恵器のように轆轤で成形されたと思われる土師器高杯など特筆すべき遺物が含まれている。出土した須恵器は須恵器編年ＴＫ208～23段階に相当する。

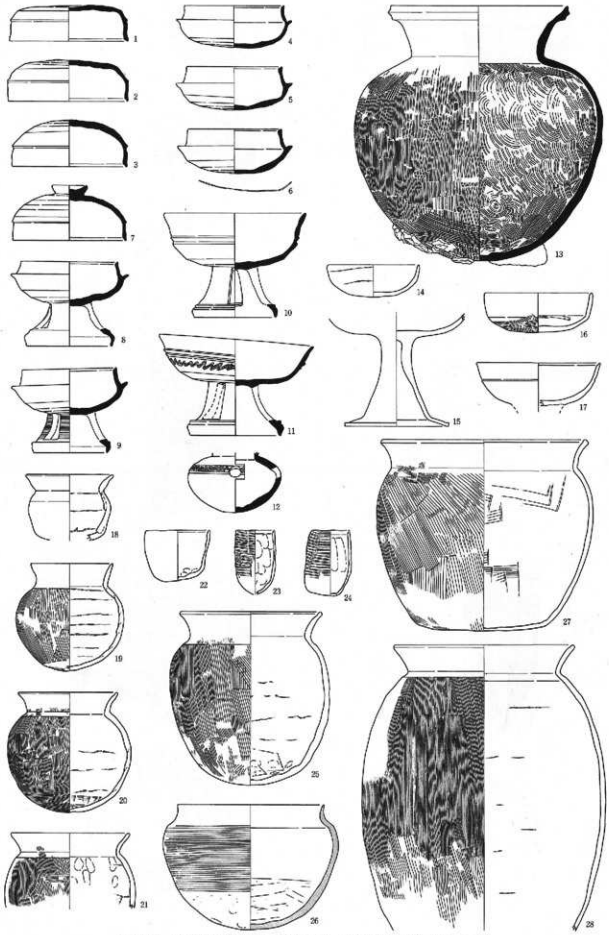
土坑4083はｉ９、10区、ｊ９、10区で検出した。平面形は方形で西端は溝4087に取り付いている。長辺7.7ｍ、短辺3.8ｍ、検出最大深さは60cmである。埋土は二層に分かれ、須恵器、土師器等が出土した。出土土器実測図の一部が第54図９～18である。14の緻密な胎土を持ち、外面ヘラ磨き



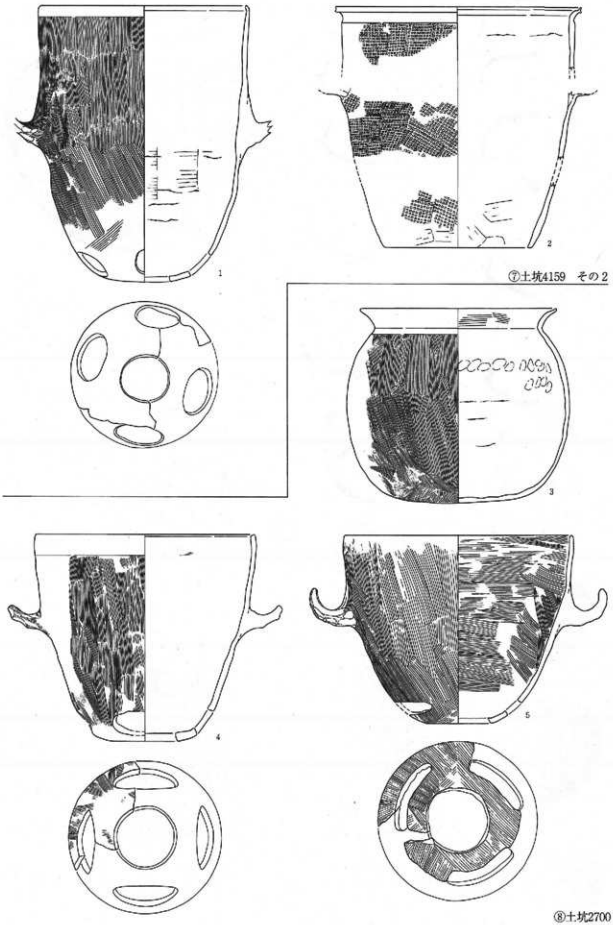
第54図　出土遺物実測図（その１）（S＝1/4）



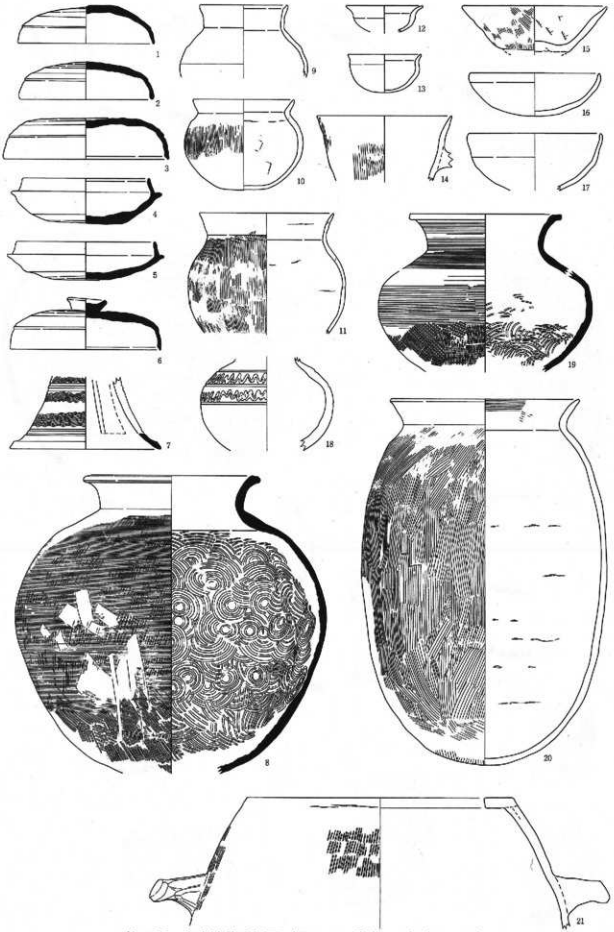
第55図 出土遺物実測図（その2）（S＝1/4）



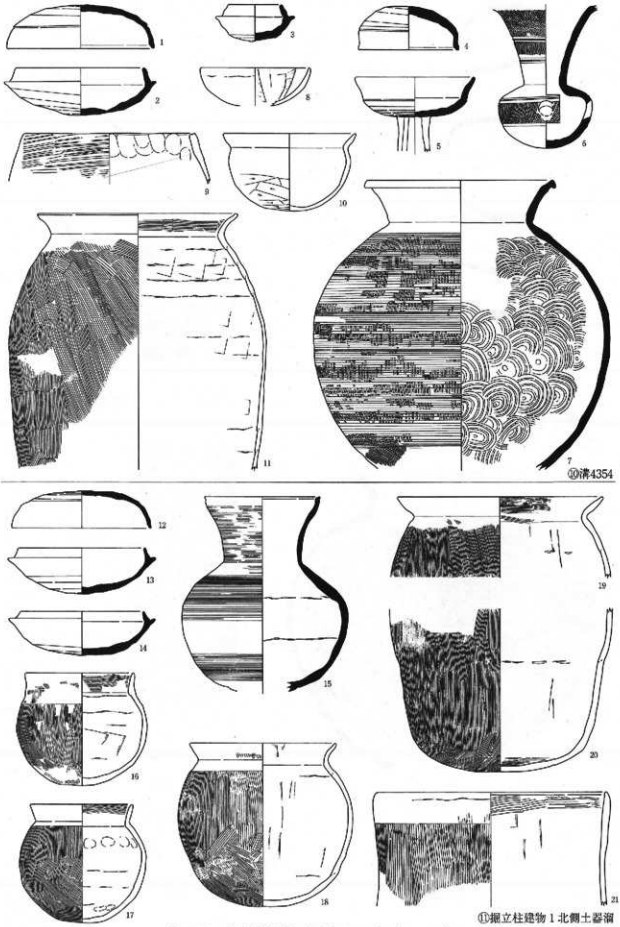
第56図　出土遺物実測図（その３、⑦土坑4159）（S＝1/4）



第57図　出土遺物実測図（その４）（S＝1/4）



第58図　出土遺物実測図（その５、⑨溝2422）（Ｓ＝1/4）



第59図　出土遺物実測図（その6）（S＝1/4）

で丁寧に仕上げられている直口壺、18の内面削りで成形された甕等、古式土師器の要素を残す土器も存在する。出土須恵器は須恵器編年TK208段階に相当する。

土坑3342（写真図版25の5）はj8区で検出した。平面形は方形で長辺約3m、短辺約2.6m、検出最大深さは30cmである。埋土は緑灰色シルトがブロック状に混じる暗灰色粘土で、須恵器、土師器等が出土した。出土土器実測図の一部が第55図22～28である。出土須恵器は須恵器編年TK23～47段階に相当する。

土坑4159（写真図版26の1）はe8、f8区で検出した。平面形はいびつな楕円形で長辺約7m、短辺約3.8m、検出最大深さは25cmである。埋土は緑灰色シルトがブロック状に混じる暗灰色粘土で、須恵器、土師器、製塩土器、瓦質土器等大量の遺物が出土した。出土土器実測図の一部が第56図1～28、第57図1、2である。15はロクロ成形された土師器高杯、26の瓦質壺、27の大型の平底甕などさまざまな韓式系土器を含む。出土須恵器は須恵器編年TK23～47段階に相当する。

土坑2700（写真図版25の6）はf6区で検出した。復元すると全体の器形が判明する甑2個体と、平底の甕が出土している。（第57図3～5）

土坑2200（写真図版26の6）はe2区で検出した。平面形は直径80cmの円形で、内部は堅くしまった炭化物で覆われていた。鍛冶関連の遺構の可能性がある。

第3章　考察

今回の調査では第10面、第11面の二つの面で古墳時代の遺構・遺物、特に建物遺構を多数検出した。第10面では古墳時代後期の遺構を、第11面では古墳時代中後期の遺構を検出しており、検出した建物遺構の数は、竪穴住居11棟、掘立柱建物34棟である。ここでは二つの遺構面から検出した建物遺構の内容を整理し、集落の時期的変遷を検討し、郡屋北遺跡の古墳時代集落の特徴を明らかにしたい。

（1）検出面と検出状況、遺構の切りあい関係

まず最初に検出状況、切りあい関係から、同時期に存在していた建物列挙してみる。上層の第10面では掘立柱建物1、2、3（柱のみ）、4、5、8、13、17の柱穴の一部を検出した。この中で掘立柱建物1、2、3、13は検出時、当時の生活面より上部に柱が残存していた。これは集落が廃絶した後柱が抜き取られることなく建物が朽ち果てていった状況を示している。この4棟の掘立柱建物は廃絶時の集落で同時存在していたことが確実な建物である。第10面東部で検出した掘立柱建物4、5からは柱材は出土していない。建物4、5の柱材は廃絶時に抜き取られたかもしれない。しかし第10面の段階ではまだ建物4、5の平面プランを確定するだけの柱穴をすべて検出しきれていなかったことなどから、建物4、5は先の4棟と同時存在せず、下層からの掘り込みである可能性がある。同じことは建物8にもいえる。第11面まで掘り下げて建物プランと切りあい関係がはっきりした建物13と17は、13の柱穴に残っていた柱の存在を重視して建物13が

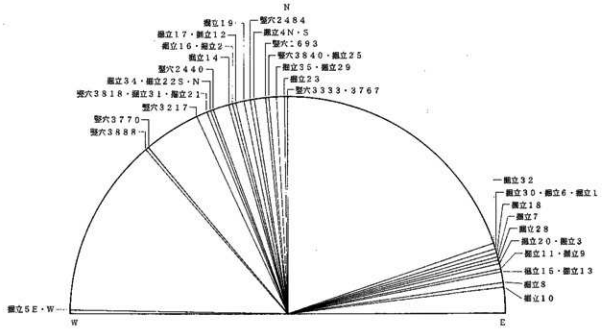
後出する建物とする。

次に第11面での検出状況と切りあい関係をみる。第11面では掘立柱建物に加えて竪穴住居も検出した。両者の先後関係をみる。竪穴住居と掘立柱建物の切り合い関係は４ヵ所ある。１ヶ所の切り合い関係の建物を旧→新の順に並べると竪穴住居3767→3770→掘立柱建物８、竪穴住居3333→掘立柱建物30、34、竪穴住居2484→掘立柱建物29、掘立柱建物24、35→竪穴住居2440→掘立柱建物６、７となる。竪穴住居同士のみの切り合い関係も二ヶ所ある。旧→新の順にならべると、竪穴住居3840→3818、竪穴住居2484→1693となる。

これまでの切り合い関係を整理すると、切り合い関係において常に下層の遺構となったのが竪穴住居3840、3767、3333、掘立柱建物23、35である。検出面と切りあい関係の結果、この５棟の建物が今回の調査区の古墳時代における最初の集落を構成する建物になる。

（２）出土遺物からみた建物遺構の時期

次に建物遺構の年代を決めるため出土遺物を検討する。竪穴住居は上層遺構による切込みが激しく、住居床面まで掘り下げる過程で厳密に個々の住居の遺物を抽出するのは困難な状況であった。住居壁溝からの遺物は図化できるものはなかったが、床面までの出土遺物のうち、須恵器はＴＫ208からＴＫ23段階の時期に相当する。竪穴住居2484のみ、かまどの痕跡の炭化物堆積層の中から支脚に用いられたと思われるＴＫ23段階に比定できる須恵器坏身を検出している。



第60図　遺物の方位

掘立柱建物は柱穴から出土した須恵器により、掘立柱建物１、２をＴＫ43～209、掘立柱建物６、８、13をＴＫ43段階、掘立柱建物７、10、29をＴＫ10～43段階、掘立柱建物４、５をＭＴ15～ＴＫ10段階、掘立柱建物25をＴＫ47段階に比定できる。それ以外の掘立柱建物は遺物により建物の年代を決定するのは困難である。建物１、７、10はそれぞれの建物に沿って、あるいは建物を取り巻くように存在する溝や土器溜りから須恵器のみならず土師器等の遺物が出土している。(第58、59図)

(３) 建物の方位

(１)、(２) の検討の結果、最古段階の遺構と考えられたのが竪穴住居3840、3767、3333と掘立柱建物24、35である。次にこれらの建物の方位を見てみる。この5棟の主軸方位はＮ－０°からＮ－５°－Ｗの間に収まる。

第60図は検出したすべての建物の長軸の方位を示したものである。竪穴住居は最古段階の３棟以外はＮ－５°－ＷからＮ－45°－Ｗの方位の間で２、３棟のまとまりをもって分布している。全体平面図をみると調査区の西に位置する竪穴住居3888がもっとも西向きの方位をもち、調査区内でもっとも東に位置する竪穴住居2484まで順に方位が東にずれていく。

掘立柱建物はＮ－５°－ＷからＮ－20°－Ｗの間に方位をとるグループと、Ｎ－70°－ＥからＮ－80°－Ｅの間に方位をとるグループがあるが、建物が縦方向か横方向かという違いの問題で長軸と短軸の方位は同じになる。

この中で掘立柱建物５、25、29はややＮ－０°に近い方位を持つので、最古段階の遺構群と関係があるのかと思われるが、３棟の掘立柱建物の出土遺物の年代は最下層の遺構群より新しく、須恵器型式では二型式程度の差が認められる。

地形との関係で建物５、25、29の配置をみると、掘立柱建物５は南東の谷部に建物の南面を合わせて、掘立柱建物25、29は北東の谷に建物の東面を合わせて立地している。これと同様に掘立柱建物10は他の建物より方位が東に向いているが、これは北西の谷に建物北面を合わせているためと思われる。また建物同士が近接して同時期に並存していたと思えないにかかわらず、同じ方位を持つ例が多数ある。

これらのことから考えて最初に蔀屋北遺跡に居住した集団は建物方位を北に向けるという規制の元に、竪穴住居3840、3767、3333と掘立柱建物24、35が構築されたが、次世代の竪穴住居も掘立柱建物も建物の方位はすべて地形に即して配置した結果をしめしているものと推定される。

(４) 建物の平面プランと柱間寸法

これまで切り合い関係、出土遺物そして建物方位を検討することにより、竪穴住居3840、3767、3333と掘立柱建物（総柱建物）24、35が最初に構築された建物群であることが判明した。この建物群により構成された集落をⅠ期の集落とする。竪穴住居3840、3767は近接しているのでさらに細分化は可能であるがここでは方位を南北にとる集団として一グループとまとめた。Ⅰ期の集落は竪穴住居と倉庫建物と想定できる総柱の掘立柱建物のセットにより構成されている。つぎにⅡ

期の集落を構成する建物を考える。住居遺構は切り合い関係から竪穴住居3888、3770、3818、3217、2440、2484が抽出できる。Ⅰ期と同様倉庫建物とのセット関係になる建物を探してみる。Ⅰ期の倉庫建物は梁間2間×桁行4間の平面プランをもつ総柱建物である。同じく梁間2間×桁行4間の平面プランをもつ総柱建物を抽出すると掘立柱建物（総柱建物）12、19、15、21が抽出できる。

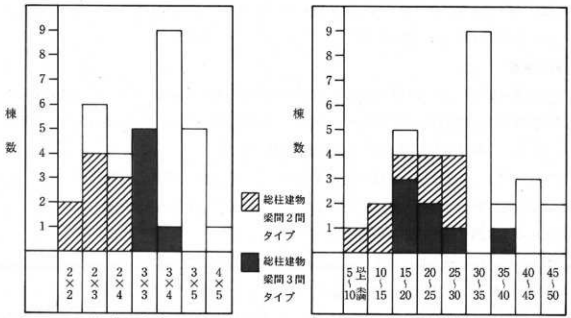
しかし今回の調査区ではこの他にも梁間と桁行の柱本数が同じ3間×3間の平面プランの総柱建物も検出している。第61図1の棒グラフは平面プランごとの検出棟数であるが、梁間が2間のタイプも梁間が3間のタイプもほぼ同数検出している。第61図2の棒グラフは床面積ごとの検出棟数である。このグラフをみるとほとんど同面積でも梁間2間×桁行3間ないし4間のタイプ（以後梁間2間タイプと記述する）と梁間3間×桁行3間（以後梁間3間タイプと記述する）の総柱建物があり、床面積の大小によってプランが異なるということはない。

出土遺物により時期が判明しているのは梁間3間タイプの建物4と建物29のみで、二つのタイプに先後関係があるのかは出土土器から決めることは困難である。具体的に梁間2間タイプの総柱建物12、19と梁間3間タイプの総柱建物9の配置を比較してみると、近接しているため同時存在はありえない。

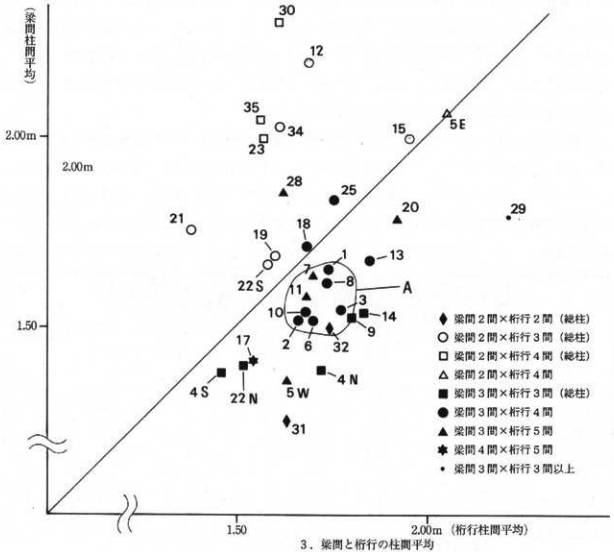
ここで梁間2間タイプと3間タイプの平面プランの一番大きな違いは、3間タイプでは梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法と同寸以下となっているということに着目して、総柱建物にこだわらず今回の調査で検出したすべての掘立柱建物の梁間と桁行の柱間寸法を調べ、蔀屋北遺跡の建物の傾向を探ってみた。第61図3のグラフは縦軸に梁間の柱間寸法、横軸に桁行の柱間寸法をとったものである。このグラフで一部の建物がAの範囲に集中しているのがわかる。Aの範囲に集中している建物は梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法と同寸かそれ以下になり、この柱間寸法を持つ建物の過半数は第10面で検出した梁間3間×桁行4間の建物である。（グラフ上では●であらわしている。）このことは古墳時代集落の建物は廃絶寸前の6世紀末段階に、規模、構造において斉一的な建物に収束していたことを表すと思われる。

ここでひとつの仮説が導きだせる。蔀屋北遺跡ではT.P.＋1.5mの低地であり土地条件からみて柱の沈み込みが発生しやすい。柱の沈み込みを防ぐため、建物の平面プランを工夫する、礎板を入れる、棟持柱を建てる、などさまざまな試行錯誤を繰り返した末、梁間の柱本数を増やして、その柱間寸法を桁行より狭くする建物プランを取る考えに到達したのではないか。すなわち梁間2間タイプの建物より梁間3間タイプの建物が後出する建物と考える。集落構造の変遷はこの建物構造の変遷に即して考えていく必要があると思われる。

掘立柱建物5が同じ位置で面積をほとんど変えず、柱の本数を増やして梁間2間×桁行4間から梁間3間×桁行5間に建て替わっていること、総柱建物4が梁間の寸法は変わらないが、桁行の柱間寸法を広げ建て替えていることなどはその試行錯誤の表れと考える。また梁間2間の総柱建物12と19、23と35が重複して建て替えられ、礎板の入り方は大きい板材のみの柱穴、小さい板



1．平面プラン別検出棟数　　2．床面積別　検出棟数



3．梁間と桁行の柱間平均

第61図　建物の平面プランと柱間寸法

材を積み足している柱穴があるなど多様性があることは、柱の沈下に対し耐久性がなかったことをしめしているのではないかと思われる。

（5）集落の変遷

これまでの検討事項をふまえⅥ期に区分した集落構造の変遷を平面図にしたものが第62図である。Ⅰ期は竪穴住居と総柱建物で構成される集落である。建物の方位はこの時期のみほぼ南北に統一されている。Ⅰ期は須恵器編年のＴＫ208段階を想定する。

Ⅱ期の集落も同じく竪穴住居と総柱建物で構成される。竪穴住居の棟数はⅠ期に比べて倍増する。この時期の総柱建物は梁間２間×桁行３間のプランをとる。Ⅱ期以降建物の方位は地形に即して配置される。Ⅱ期は須恵器編年のＴＫ23段階を想定する。

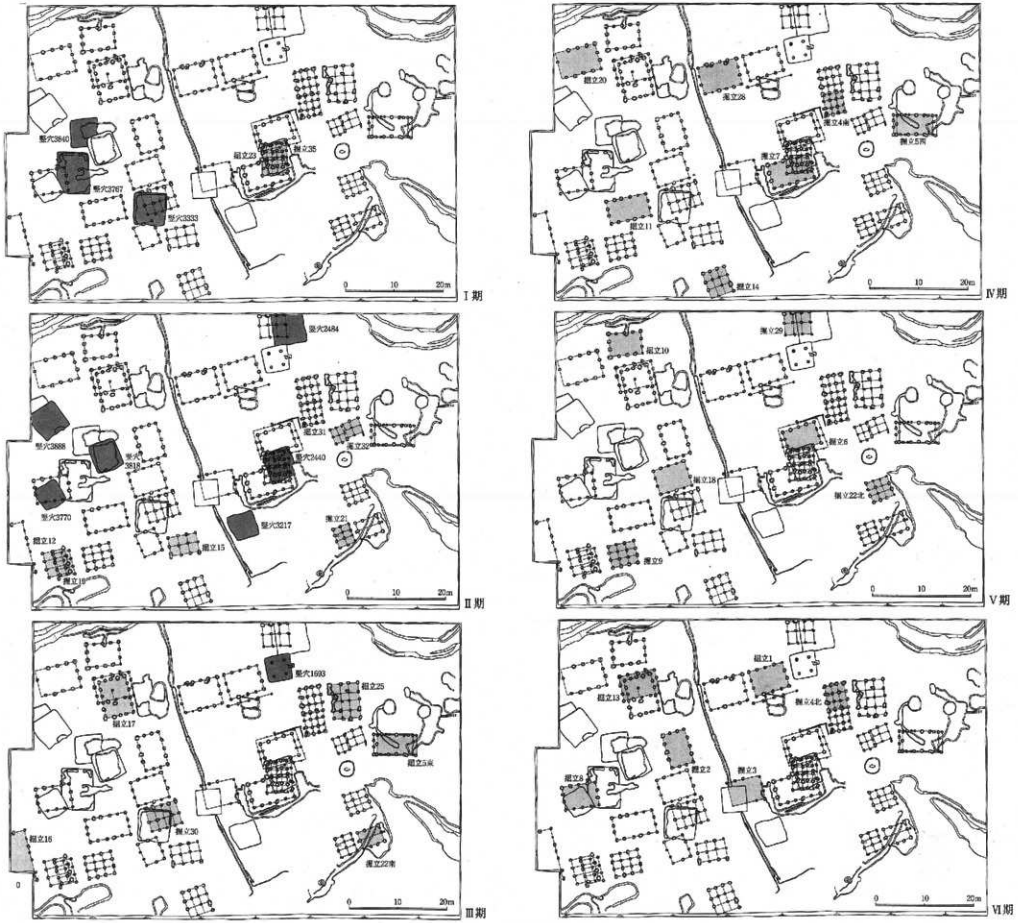
Ⅲ期の集落は竪穴住居から掘立柱建物への過渡期、また掘立柱建物のさまざまな平面プランが工夫される時期とする。竪穴住居1693は上面からの掘り込みがなく他の竪穴住居より後出するものとしてこの時期の建物とした。掘立柱建物では17や22南のように棟持柱を持つものをこの時期の建物とした。建物外回りの柱穴のみ礎板をしきこんだ掘立柱建物25は、床面積が広く他の総柱建物と様相がことなる。倉庫建物ではなく高床住居とも取れる。梁間３間タイプであるが、柱間寸法を調べると梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法より広い。これらのことから建物25は建物平面プランが斉一化するまでの過渡期の建物とする。掘立柱建物16は平面プランも確定できていないが、検出したすべての建物の中でとびぬけて太い柱が使用されており特異な建物といえる。Ⅲ期の集落は須恵器編年のＴＫ23からＴＫ47段階を想定する。

Ⅳ期は梁間３間×桁行５間の大型の掘立柱建物に梁間３間×桁行３間の総柱建物が並存する時期とした。建物の平面プランは、柱の本数を増やして梁間の柱間寸法を桁行の柱間寸法より狭くしていく方向に変化していく。梁間３間×桁行５間の大型の掘立柱建物は、梁間３間×桁行４間の掘立柱建物との建物と同時併存はないか検討が必要であるが、掘立柱建物20と10、13、そして掘立柱建物３、６、７の近接関係を見て、同時併存はないとした。この時期掘立柱建物５は梁間

	土師器										韓式系土器									その他				須恵器								須恵器編年による時期	集落変遷の時期区分
	高杯 椀型高杯	高杯 外反口縁の高杯	高杯 大型高杯	高杯 ロクロ成形の高杯	椀	壺 小型直口壺	鉢 小型鉢	鉢 鉢	甕 中小丸底甕	布留系甕	長胴甕	把手付鉢	鍋	甑	平底鉢	平底甕	把手付甕	鍔付羽釜	瓦質土器	U字型土製品	カマド	製塩土器	鉱滓	杯蓋、杯身	高杯 有蓋高杯一段透かし	高杯 無蓋高杯一段透かし	高杯 長脚高杯	はそう	壺	甕	器台		
①2331	○	△	－	－	－	○	－	－	－	○	－	－	－	○	○	－	○	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	TK73～216？	Ⅰ期？
②4083	○	△	○	○	－	○	－	－	○	○	△	－	△	○	○	－	－	－	－	○	－	▽	－	○	－	－	－	○	－	○	○	TK208	Ⅰ期
③3485	△	△	△	○	－	－	○	－	○	－	○	－	○	○	－	－	－	○	○	○	－	◎	－	○	○	－	－	○	－	○	○	TK208～23	Ⅱ期
④2203	－	－	－	－	○	－	－	○	○	－	○	－	○	△	－	－	－	－	－	○	○	▽	－	○	○	－	－	－	○	－	－	TK23	Ⅱ期
⑤2205	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	○	－	△	○	－	－	－	－	－	○	－	▽	○	○	－	○	－	－	○	－	－	TK23	Ⅱ期
⑥3342	－	－	－	－	－	－	－	○	○	－	○	－	△	△	－	－	－	－	－	－	－	○	－	○	○	－	－	－	○	○	－	TK23～TK47	Ⅱ～Ⅲ期
⑦4159	○	－	○	○	○	○	－	－	○	－	○	－	－	○	－	○	－	－	○	○	－	◎	－	○	○	○	－	○	○	○	－	TK23～TK47	Ⅱ～Ⅲ期
⑧2700	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	○	－	－	○	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	TK23～TK47？	Ⅱ～Ⅲ期？
⑨2422（掘立７周辺溝）	－	○	－	○	○	－	○	－	○	－	○	○	－	○	－	－	－	－	－	○	○	▽	－	○	－	－	○	－	－	○	－	MT15～TK10	Ⅳ期
⑩4354（掘立10周辺溝）	－	○	－	－	○	－	○	○	○	－	○	－	－	○	－	－	－	－	－	－	○	▽	－	○	－	－	○	○	－	○	－	TK10前後	Ⅴ期
⑪掘立１北土器溜	△	△	△	－	○	－	○	○	○	－	○	－	－	○	－	－	－	－	－	－	－	▽	－	○	－	－	○	－	○	○	－	TK43前後	Ⅵ期

◎多量に存在する　○存在する　△存在が推定できる　▽ほとんど存在しない

第４表　主な遺構の出土遺物器種変遷



第62図　集落の変遷

2間×桁行4間から梁間3間×桁行5間に建て替わったものとする。Ⅳ期の集落は須恵器編年のMT15からTK10段階に比定できる。

Ⅴ期とⅥ期はともに梁間3間×桁行4間の掘立柱建物に梁間3間×桁行3間の総柱建物が並存する時期とした。掘立柱建物の平面プランは斉一化し、梁間3間×桁行4間に収束する。Ⅴ期の集落は須恵器編年のTK10から43段階に、Ⅵ期の集落は須恵器編年のTK43から209段階に比定できる。

土坑や溝等建物以外の主な遺構も、出土した須恵器の編年によりⅠ～Ⅵ期の時期区分を当てはめた。第4表は主な遺構からの出土遺物の器種変遷を一覧にしたものである。表をみるとⅠ～Ⅲ期は平底鉢、取手付き鍋や甑鬲を使用して製作された高杯さらに瓦質土器等のさまざまな韓式系土器が出土している。大量の製塩土器が出土しているのはⅡ期の土坑で、U字型土製品、鉱滓など鉄鍛冶関連遺物もこの時期の土坑から出土している。馬の骨や準構造船の存在も考慮すると、蔀屋北遺跡はⅠ～Ⅲ期、特にⅡ期の時期を中心として、朝鮮半島と直接交流を持つ集団が馬の飼育や鉄鍛冶など先進技術を保有、駆使して居住していた、といえるであろう。

Ⅳ期以降は直接的に朝鮮半島や、大陸との交流を示す遺物は乏しい。甑や長胴甕といった韓式系土器は出土するが、それらは既に国産化されたものと思われる。製塩土器の出土量も激減している。しかしⅣ期以降もおおよそ半世紀以上連綿と大型の掘立柱建物が存在し続ける。居住集団はいかなる集団であったのか、今後遺構、遺物のさらなる詳細な検討が必要である。蔀屋北遺跡は大阪湾につながる河内湖沿岸に立地していたことから、Ⅳ期以降の集落は河内湖沿岸の港湾ターミナル的な集落として重要な役割を担っていたのではと想定しておきたい。

最後になりましたが、長期にわたる現地調査や、遺物整理、概要作成に協力してくれた方々、貴重なご教示をいただいた方々に感謝の意を表して、本概要報告書の終わりといたします。

報告書抄録

ふりがな	しとみやきたいせきはっくつちょうさがいよう・に
書名	蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤田道子
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL 06－6941－0351
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
蔀屋北遺跡（しとみやきたいせき）	四條畷市（しじょうなわてし）蔀屋・岳（しとみやき・すな）	27229	7(51)	34° 44′ 25″	135° 37′ 52″	平成14年5月7日から平成15年12月5日	5713㎡	なわて水環境保全センター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔀屋北遺跡	集落跡・生産域	古墳時代	住居跡、井戸、カマド、溝、土坑	陶質土器、韓式系土器、製塩土器、滑石製臼玉、紡錘車、下駄、舟形木製品など	柱が良好に残存している掘立柱建物、朝鮮半島からの移住民の存在を予想させる遺物

蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ

発行日　2005年3月31日
発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06－6941－0351
印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷5丁目6－25

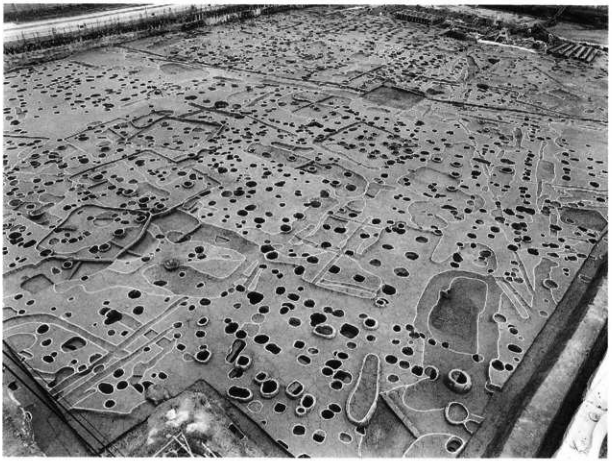
図　　版

第11面　東半部垂直写真

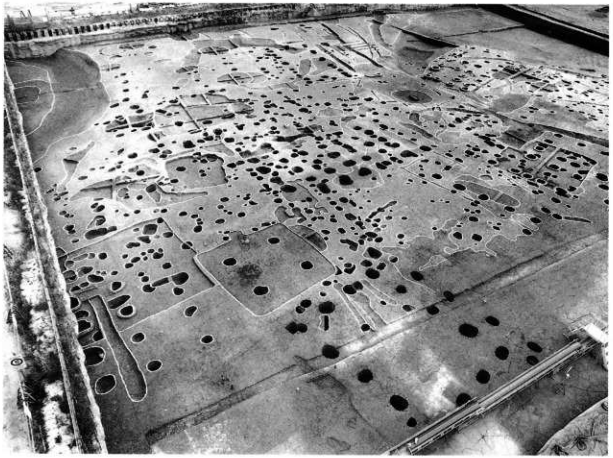
1．調査地遠景（南から）

2．調査地遠景（北から）（上から順にA，B，C調査区）

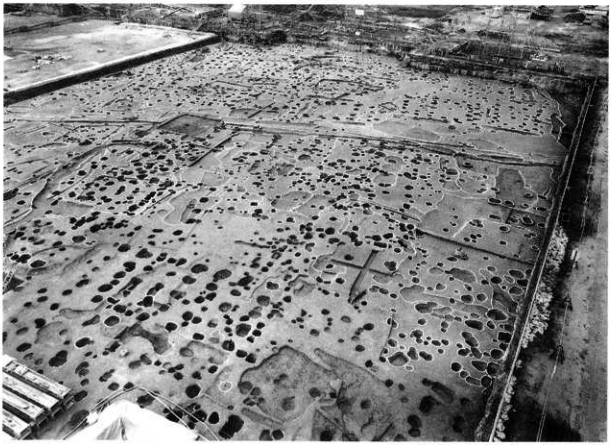
1．第11面（東部）全景（北東から）



2．第11面（西部）全景（南西から）



1．第11面（東部）全景（北西から）

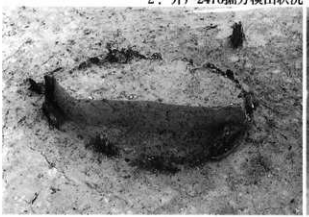


2．第11面（西部）全景（北東から）

1．井戸2476井戸枠（上部）設置状況

2．井戸2476掘方検出状況

4．井戸2476井戸枠内とめ木設置状況



3．井戸2476井戸枠検出状況

5．井戸2476井桁上部検出状況

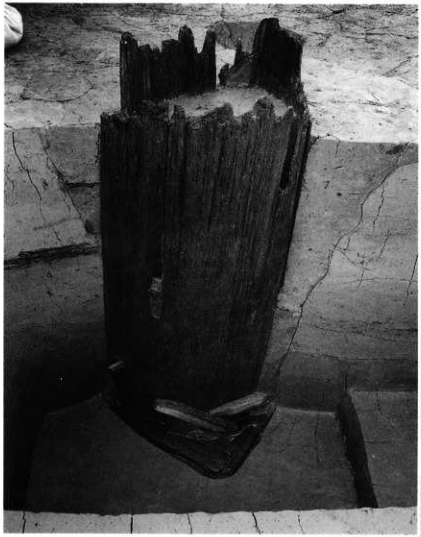
1．井戸2476井桁（下部）設置状況

2．井戸2476井桁北東コーナー部

3．井戸2476井桁北西コーナー部

4．井戸2476井桁内遺物出土状況

5．井戸2476井桁内遺物出土状況（下層）



1．井戸2549井戸枠設置状況

2．井戸2549井戸枠検出状況

3．井戸2549井戸枠内とめ木出土状況

4．井戸2549井戸枠外面とめ木検出状況

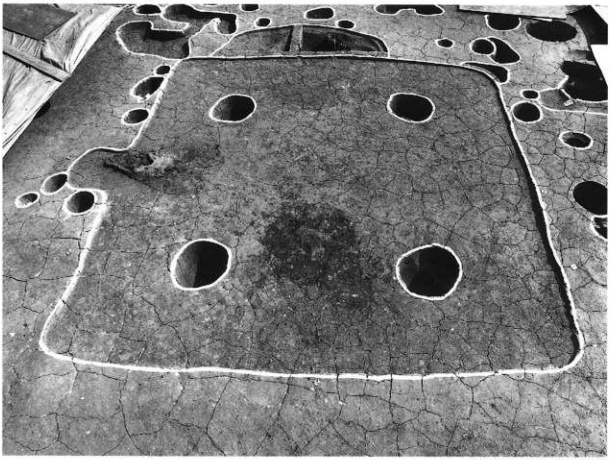
5．井戸2549内ひょうたん出土状況

6．井戸2549井戸内遺物出土状況

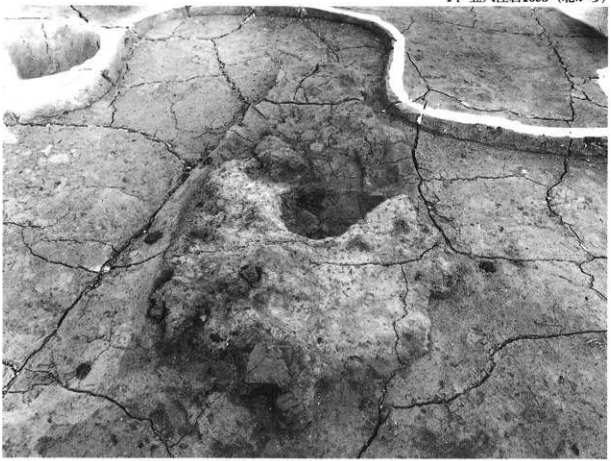
1．井戸2549
敷板検出
状況

2．井戸2549
敷板除去
後遺物出
土状況

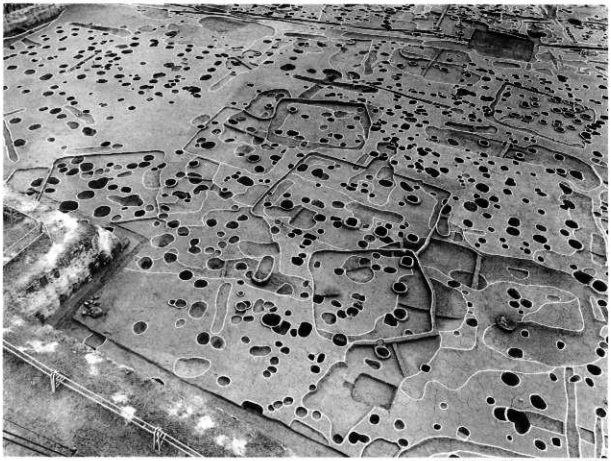
3．井戸2549遺物出土状況（最下層）



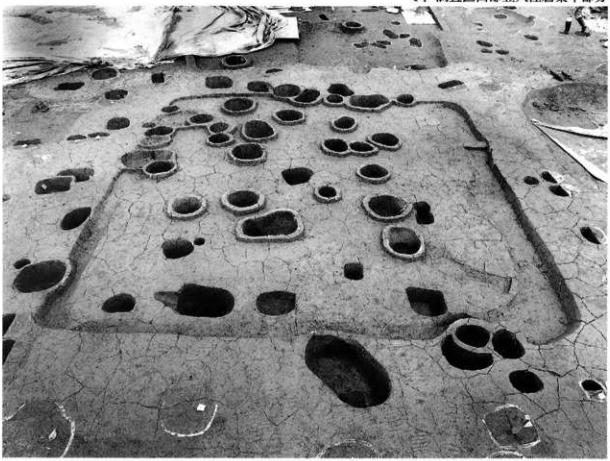
1．竪穴住居1693（北から）



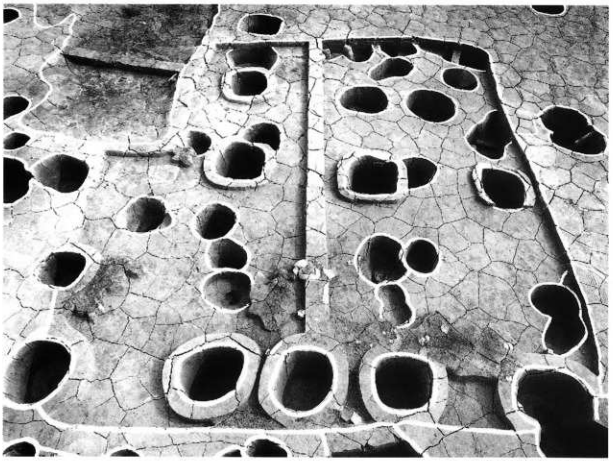
2．竪穴住居1693内カマド



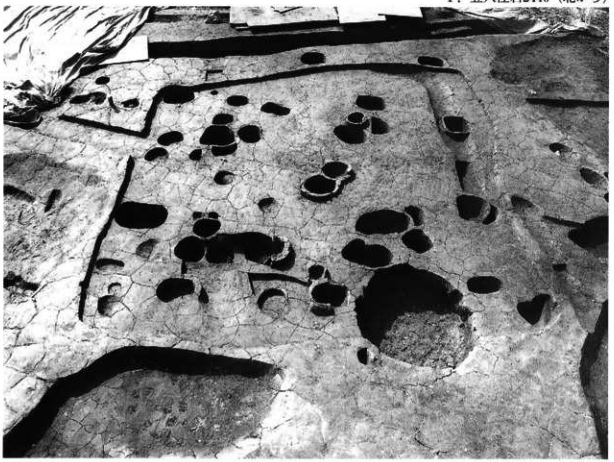
1．調査区西部竪穴住居集中部分



2．竪穴住居3333（北から）



1．竪穴住居2440（北から）



2．竪穴住居3217（東から）

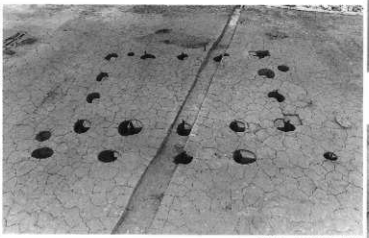
2．1605

3．1606

4．1607

5．1608

14．1602


1．建物1柱検出状況

6．1610

13．1601

7．1611

12．1600

11．1617

10．1616

9．1614

8．1612

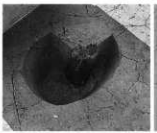
15．1618

16．1690

17．1615

18．1613

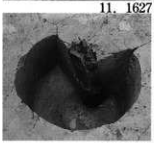
2．1629



3．1630

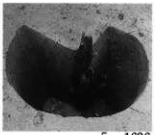
4．1631

11．1627

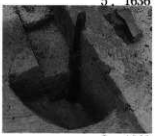


10．1626

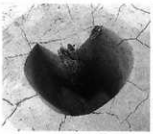
1．建物2柱検出状況



5．1636

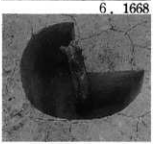


6．1668



9．1639

8．1638



7．1637

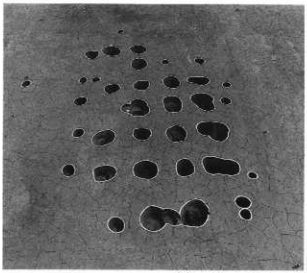
建物3柱検出状況

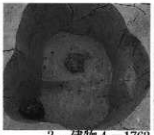
10．3479

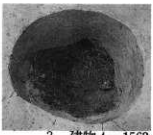
11．3480

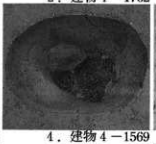
12．3504

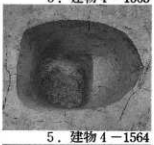
13．3513


1．建物4第10面検出状況

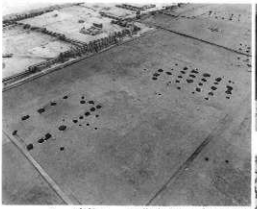

2．建物4－1762

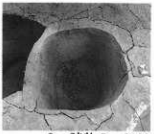

3．建物4－1563


4．建物4－1569


5．建物4－1564

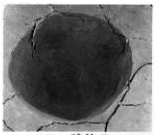
6．建物4－1573

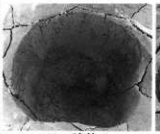

7．建物4．5北東から（第10面）

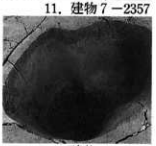

8．建物5－2182

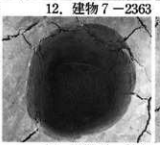
9．2276下駄出状況

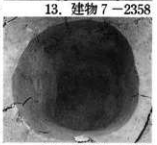
10．建物6．7垂直写真

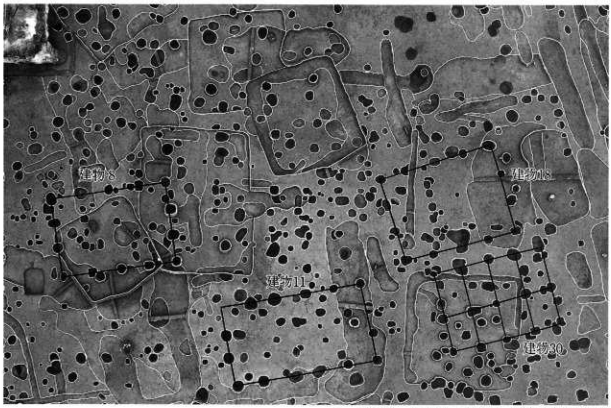

11．建物7－2357


12．建物7－2363


13．建物7－2358


14．建物7－2367


15．建物7－2359



1．建物８、建物11、建物18、建物30垂直写真

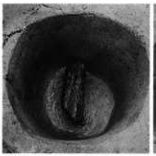
2．建物18－4406

3．建物８－1549

4．建物８－3774

5．建物11－4001

6．建物11－4002

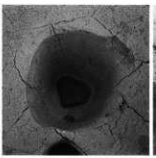


7．建物11－3683

8．建物11－3674

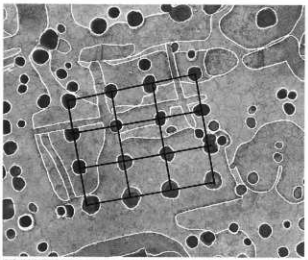
9．建物30－3332

10．建物30－3312



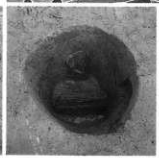
11．建物30－3452

12．建物30－2996

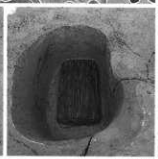


1．建物9垂直写真

2．3700



3．4050

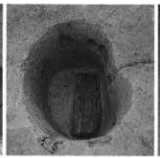


4．4049

5．4048

6．3698

7．4118

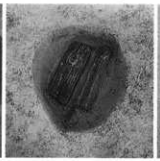


8．4119

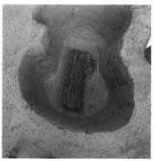
9．3387

10．3696

11．4117



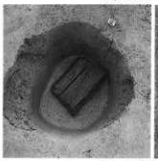
12．4056



13．4059

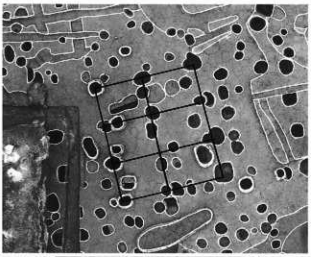
14．4115

15．4116



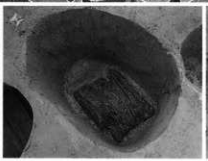
16．4057

17．4058

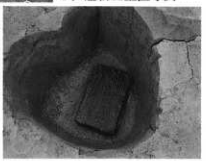


1．建物12垂直写真

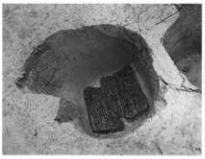
2．3703



3．4137



4．4141



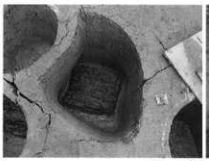
5．4713

6．4132

7．3690

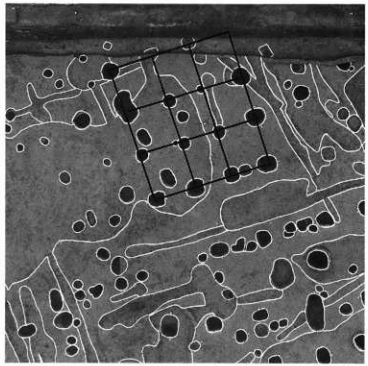
8．4125

9．3688

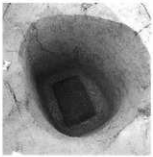


10．4106

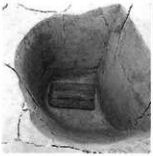
11．4110



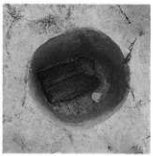
1．建物14垂直写真



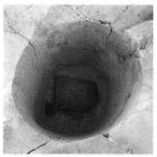
2．3210



3．2863

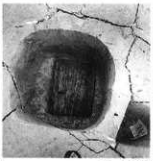


4．3250



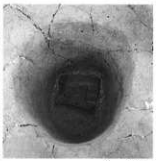
5．2906

6．3198

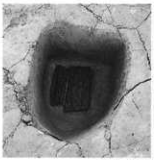


7．3195

8．2900



9．2904

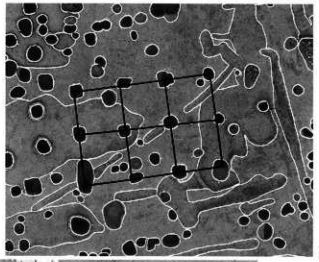


10．3201

11．3199

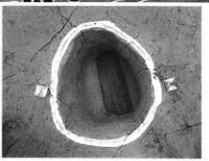
12．2901

13．2903



1．建物15垂直写真

2．2920



3．4763

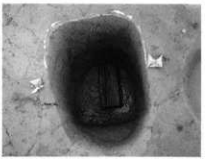
5．2921

6．2923

7．2925

8．2963

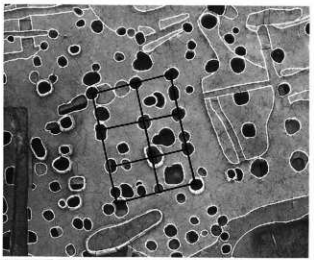
9．4764



10．2942

11．2966

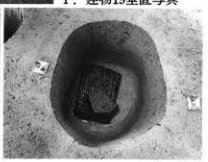
12．3536



1．建物19垂直写真

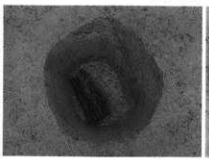
2．4133

3．4136



3．4142

5．4123



6．4127

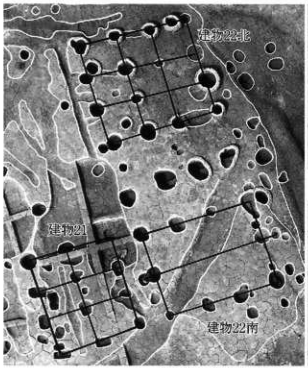
7．4126

8．3694

9．4112

10．4104

11．3695



1．建物21、建物22垂直写真

2．建物21－2486

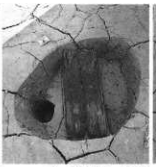
3．建物21－2517

4．建物21－2513

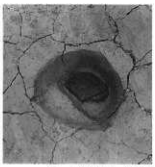
5．建物21－2516

6．建物22－2260

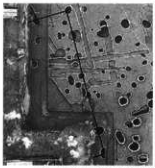
7．建物22－2266



8．建物22－2580

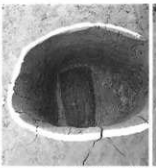


9．建物22－2552



10．建物16垂直写真

11．建物16－4705



12．建物16－4716

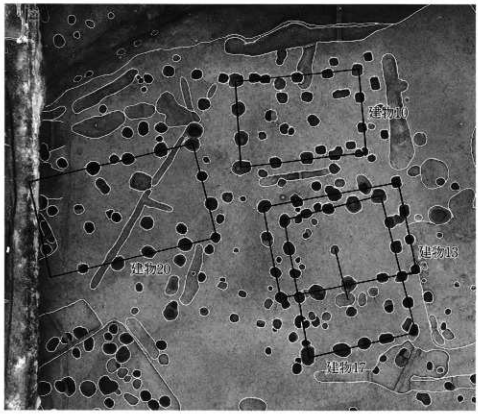
13．建物16－4715

14．建物16－4643

15．建物16－4671

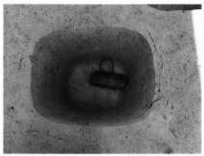
16．建物16－3751

17．建物16－3754



1．建物10
建物13
建物17
建物20
垂直写真

2．建物10－4349

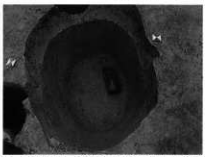


3．建物10－4343

4．建物13－1677

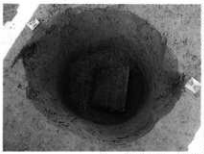
5．建物17－4307

6．建物17－1673



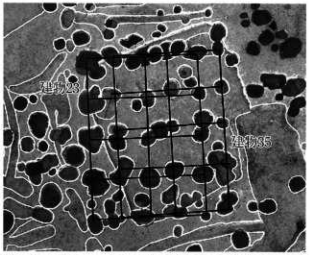
7．建物17－3848（下駄出土状況）

8．建物20－4384



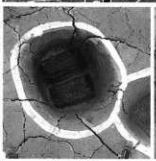
9．建物20－4372

10．建物21－4403



1．建物23、建物35
垂直写真

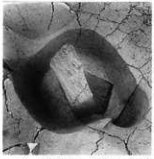
2．建物23－2754



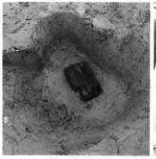
3．建物23－2575

4．建物23－3073

5．建物23－2566

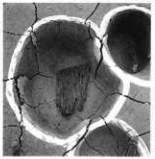


6．建物23－2754（上）

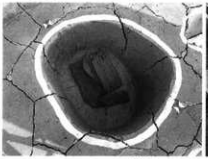


7．建物23－3071

8．建物23－2397



9．建物23－2570

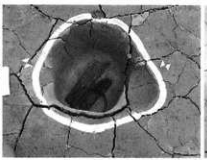


10．建物35－2564

11．建物35－3074

12．建物35－2733

13．建物35－2565



14．建物35－2578

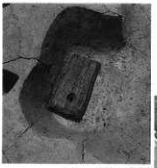
15．建物35－2755

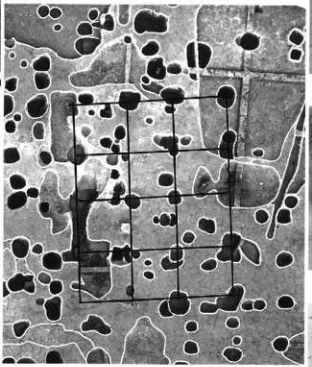
12．1755（北）

13．1800

14．1890

2．2442


11．1755（南）


1．建物25垂直写真

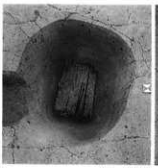
3．2443

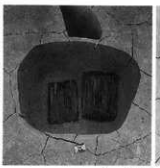
4．2773

10．1922

5．2093

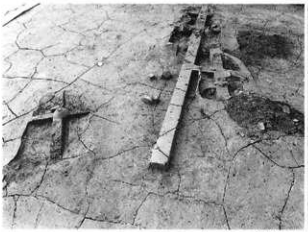
9．2779


8．2778


7．2049

6．2088

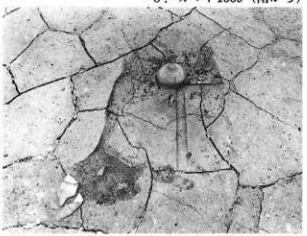
1．カマド1560（南から）



2．カマド群全景

3．カマド1559（南から）

4．建物1北側上器溜



5．カマド1557（南東から）

1．2487遺物出土状況（南から）

2．2422遺物出土状況（西から）

3．2210検出状況（北から）

4．2927遺物出土状況（西から）

5．3342遺物出土状況（東から）

6．2700遺物出土状況（東から）

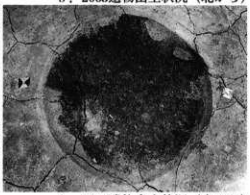
1．4159遺物出土状況（北から）

2．2203遺物出土状況（北から）

3．3485、3486検出状況（南から）

4．2205遺物出土状況（東から）

5．2063遺物出土状況（北から）



6．2200遺物出土状況（東から）

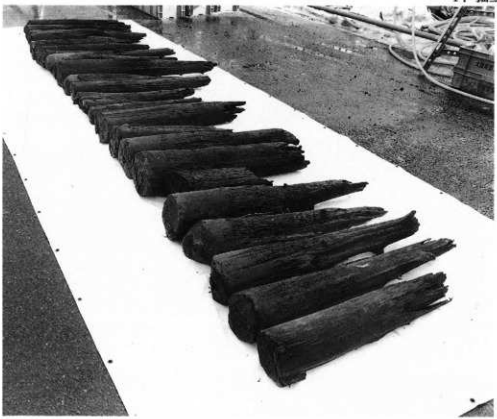
1．井戸2476出土遺物

2．井戸2549出土遺物

1．滑石製石製品、土製紡錘車

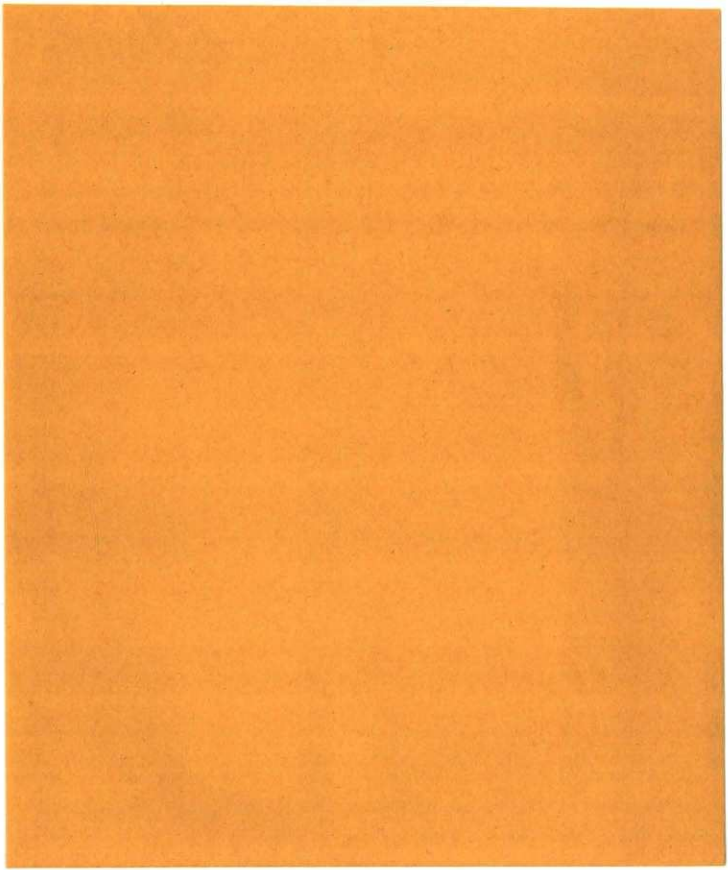
2．砥石、ふいごの羽口、椀形鍛冶滓、鉄製品

1．掘立柱建物1出土柱材



2．掘立柱建物1、2出土柱材

3．掘立柱建物12柱穴出土礎板

4．掘立柱建物14柱穴出土礎板

蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ　付図　第11遺構面全体平面図